

特104

40

× 複写

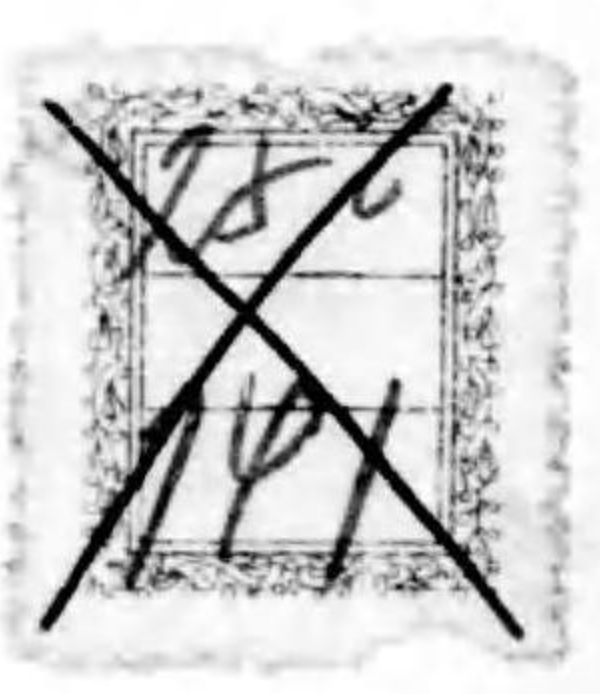
古屋鐵石講述

# 精神療法講義録

第六輯

生靈死靈術 西洋按摩術

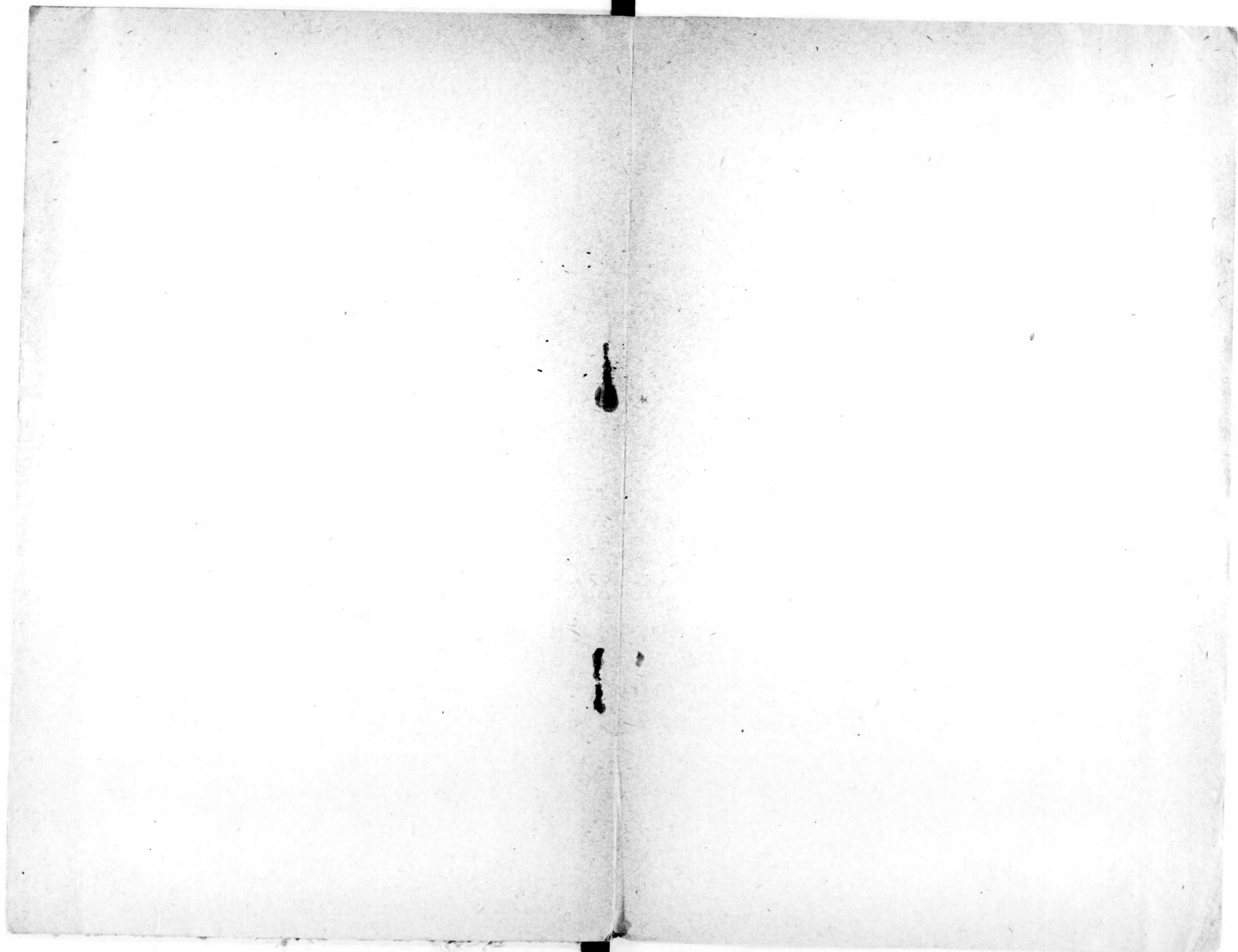
東京精神研究會



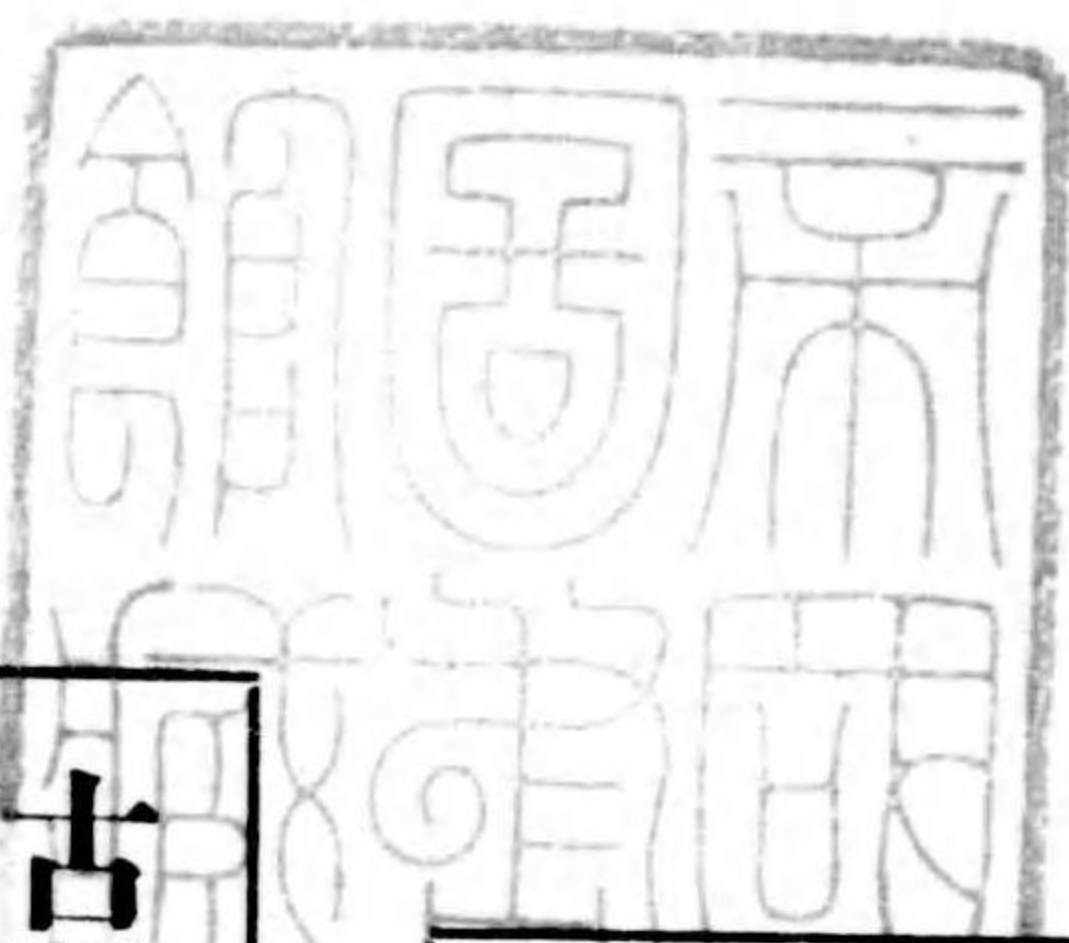
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18m</sup> 1 2 3 4 5

# 始





持104  
40



講述	生靈死靈術
科目	西洋按摩術

古屋鐵石講述志賀光明講述

精神療法講義錄

第六輯

大正  
9. 11. 3  
內交

## 自序

此書に集めたる所の生靈死靈の現象は、世界に名高き學者が實驗に立合ひて之を證明せる所なるを以て、記述せる事柄は眞實なることは明確にして、一點の疑ひを挾むの餘地はない、然るに其現象は實に奇絶、怪絶、珍絶、妙絶にして、科學にては到底説明し得ざる珍々妙々の現象のみであるが、此現象の存在は否定することを得ない、依て科學にては到底説明し得ざる不可思議の生靈死靈が宇宙間に存在し、奇怪の働きをなす事實を認容せらるゝのでありませう、私は徒に不可思議の奇象を羅列して、世人の

好奇心に投ぜんとするものではありません。

此書に集めし所の不可思議の生靈死靈は如何なる學理に依り現出さるゝのであるか、の研究を學者に願ひ、且靈的精神療法を研究せんとする人は、是非心得べき靈魂問題解決の一助ともなり、又吾人は獨り肉體生存中に於て、生靈を働かして一身一家一國一君の爲めを圖るに止めず、肉體死後靈魂を永遠に如何に活動せしめんか、吾人の一生は人生五十年と稱して誠に短い、が、肉體死後の靈魂は永遠に不朽の生命を以て居る、永遠不朽の靈魂を最も有意義に、國家的に、人道的に、活動せなければならぬとの信念を得て、之に依て是を研究し修養せんとする動機と

も本書が若し成るを得ば、私は望外の光榮とする者であります。

大正九年庚申夏日

古屋 鐵石 識

明治天皇御製

雨だりに窪める石を見ても知れ  
かたき業とて思ひすてめや  
くろがねの的射し人もあるものを  
貫きとほせやまとだましひ

生靈死靈術

目次

第一章	緒言	一
第二章	生靈死靈研究の沿革	二
第三章	死後靈魂存續の證明	六
第四章	生靈死靈交換術	二二
第五章	人體物體空間浮動術	二七
第六章	靈魂世界現出術	一九
第七章	幽靈飛動現出術	二三
第八章	交靈遠視遠聽術	二八
第九章	摩訶靈怪鬼神術	三〇

第十章 玄妙不可思議靈體術……………三四

第十一章 靈力寢臺飛上術……………三六

第十二章 肉死靈生阿修羅術……………三九

第十三章 幽靈寫眞撮影術……………四四

第十四章 男女精神交接術……………四六

第十五章 遠隔者即感術……………四七

第十六章 男女思想傳達術……………四九

第十七章 人體磁力術……………五三

# 目次終

# 生靈死靈術

古屋鐵石講述

## 第一章 緒言

世界に著名の大靈象

生靈死靈術とは生存在中の靈と死後の靈とが神變不可思議の現象を起す術である。本書には世界に涉り著名なる生靈死靈の大珍現象を擧げて之れを紹介し、研究せむとするものであります。本書にて紹介せる生靈死靈は實に不可思議にして今日の科學を以ては到底否定せざるを得ざる現象のみであるが、事實なる事は大學校教授博士男爵裁判所の檢事等が始終實驗に立會ひて、一點も疑ふ餘地なしとて確認して報告したる其報告を輯録したるものであります。依之本書にて紹介した所の實驗は、奇妙にして科學にては到底説明し得ざる不可思議の現象のみなるも、確かに事實なることを承認せられ、而して後に研究せられたい、科學上の學説は永世不變の眞理なる

かの如く思ふ人あるは愚も亦甚だしい彼のラヂウムが発見せられざる前は、鐵板を貫く光線ありと云は、科學者は其れは愚者の言なりと大笑せしならむ、然るに何ぞ圖らむラヂウム発見せらるゝや、ラヂウムの輻射線は鐵板を貫く事は人皆之を知るに至れり、故に今日の科學で説明し得ざる現象なりとて、一概に虚偽なりと思ふは其人こそ愚者である、普通の科學で説明の出來ぬ不可思議玄妙の生靈死靈であればこそ、私は好むで之を輯録し研究せんとするものであります、如何にせば斯る不思議の現象を得し得るか、尙進むで此不思議の現象に優ること數百萬倍、奇絶怪絶なる奇現象を起し得るか、を講究せむと欲するものであります、本書に集めし不可思議の靈象は、私が二十有餘年間爰に志して居り諸書より材料を見當てるや直に之を抄出し置きたるものを集めたのであります、故に文體も區別に成つて居ります、其點は御諒察の上に御研究を願ひます。

科學で説明出來ぬ靈象

## 第二章 生靈死靈研究の沿革

世界の學者が最も信頼して居るアツディングトンブルース氏の著歐米に於ける心象研究の狀況と云ふ書に下の如き記事あり曰く心象的現象の研究が當然科學の一分科であることを世人に認めしめようとして、其の研究に従ふ幾多の人々が少からず努力したにも拘らず、まだ彼等の豫期に添ふ丈けの効果を擧げることが出來ない、科學的の氣質と訓練とを有する人の中にも、此研究の確實なことを唱道したものが決して二三に止まらな

い。乍然まだ一般科學界は斷乎として不信と疑惑の眼を以て之れを眺め、又一般公衆も殆んど之れと同様の態度を取つて居る。如何にも一般公衆の間にあつては、之れに對する興味は漸次増大しつゝある。殊に米國に於ては、數年前伊太利の有名なメデアム諸種の不思議な事を演じ、變形を現はし、死人の世界より來る音信を媒介する人にて大抵は女子なりユーサビヤパラダイノイが到着以來目撃されるやうに信用も興味も漸次加はりつつあることは事實であるが、其れも重に好奇心から來るものに過ぎない。然しながら此心象研究が只漫然歡迎せられると云ふのみでなく、幾分なり

疑惑説



とも科學の理論と一般民衆の意見に承認されると云ふものは、其處に多くの理由があるのである。嘗て大グラツドストーンは、心象研究は『世界中に於て爲されつゝある事業中最も重要なものである』——遙かに群を抜いた重要な事業である』と云つた。而して、此言葉も一見して感ずる程決して誇大なるものではない。心象研究は多くの人が考へて居る様に、幽霊話を集めたり又は椅子や机が空中に浮ぶのを觀察するものではない。死後の生活と云ふものが果して存在するであらうか否かを科學的に論斷するのが心象研究の目的で、そして其れが吾人に對して有する實際上の至大な關係をも研究するのである。

死後の生活

死後の生活に科學的證明を與へやうと諸方面より探究した結果心象研究者は人間の本性上に、殊に人間精神の作用と力との上に全く新しい光明を投げる許多の發見をした。佛蘭西の心理病理學者や醫學心理學者の諸發明を確證し、又或程度までは之れを豫言した。『暗示』が人の生活上に驚くべき勢力を持つて居ることや、『副意識』(Subconscious) 潜在意識とも云ふが

心象研究の大

人の身體上、智力上、道德上に關して如何なる任務を盡して居るかは、今は既に多くの人の知つて居る所であるが、此發見に就ては心理病理學者と同様心象研究者に負ふ所が多い。此の如くして現代の醫學、心理學、社會學、犯罪學、及び教育學は彼等に負ふ所頗る重いのである。時には心象研究の恩誼を——死後の存在などは到底科學的に研究され得るものでないと頭から其價值を否定して、此研究に僅かの同情も持たない科學者の中にも、其恩誼を切に感じて居るものがある。心理病理學者として有名なドクトルモートン、プリンス氏と、ドクトルボリス、シテイス氏とは、其生涯の事業を決定せしめた發奮は、佛蘭西の泰斗から得たのではなくて、英國の二人の心象研究者からであると云ふた。プリンスドクトル曰く、病氣の原因として及び治療上の働力としての精神の副意識状態を研究するの必要に始めて注意し、此研究に自分の一生涯を費さうと決心したのは、エドマンド・ガーネー氏の催眠術に關する實驗報告を讀んだ時であつたと。

心象研究の諸學者

シデイスドクトル曰く、心理病理學に對する興味は自分がフレデリック・マ  
イヤース氏の副意識の豫備的研究の結果に接した時から始まつた。心理  
學と醫學との密接な關係に始めて予の眼を開いたのは實にマイヤース氏  
であつたと。

此等の言葉はグラツドストーン讀辭の幾分かを説明するに足りやう、又心  
象研究は科學界一般から未だ何等の承認をも得ないに拘らず、ジエームス  
教授、オリウア・ロツチ、キリアム・クルクス、ロドレーライ、モーセリ教授  
及び故ロムブローゾー教授等の個々の科學者が進んで其現象の研究に當  
ると云ふ事實をも説明出來やう。

### 第三章 死後靈魂存続の證明

心象研究協會が催眠術の研究を企てたのは固より其疾病治療上の價値を  
確定せんと欲したのではない。其目的は普通の感覺器官を全く離れ、一人  
の思想を他人に傳達することの可能なりや否やの問題に關して、催眠術の

思想傳達の實驗

方面より幾分なりとも其の光明に接せんと欲したのである。ケムブリッ  
チの幽靈協會が蒐集した材料に依ると著しく此思想傳達の可能を示し  
て居る。而して佛蘭西獨逸英吉利亞米利加のメスメリズムの實驗的報告  
に依ると、若し眞實斯る思想傳達と云ふが如きものゝ存するならば、その睡  
遊状態に於て最も起り易いものであると云つた。それ故に心象研  
究協會の設立せらるゝや否や、三侧面の特殊的研究を起して第一は催眠的  
夢幻の秘密を曝露し、第二は覺醒状態に於ける思想傳達を探究し、第三は同  
時に起つた思想傳達を研究することとして、各々其方面に盡した。

此等諸方面に於ける實驗の詳細は千八百八十三年から翌年に亙る協會の  
『事務報告』に依つて窺ふことが出来る。又同時的思想傳達に就てはマイ  
ヤース氏とフランク・ポットニア氏との助力を得て、エドマント・カーネー  
氏の手に成つた『生者の幻像』と名づくる二卷の書籍に就て知ることが  
出来る。吾人は今此等に就て詳細に述べることには出来ない。只協會の文  
書課は、『吾等の協會は思想傳達——所謂感官の媒介を一切離れて思想感

情印象を他人に移すこと——の事實を確證した」との斷案を記載せざるを得なかつたと云ふに止めやう。又同年の終に現はれた妖怪變化等の本質を研究した報告にも亦同様の意見を發表して居る。曰く

「吾人の目的は思想傳達の隱微な現象と世に所謂幽霊との間の關係を研究せんと欲するのである。其結果は人の精神中の副意識的範圍内に入つて或作用を現はす刺激には其程度が無數あつて極めて隱微なものより始まり、嵩じては彼れの主觀性を脱して眼前の世界に現はれるまでに至るものゝあることを知つた」と。

千八百八十三年に記載された此報告に、現今心理學上に議論の中心點となつて居る副意識と云ふ文字が始めて現はれた。思想傳達の證明を得んとすの協會員が多年の努力は此處に他の重要な問題を喚起した。即ち彼等は催眠、夢、幽霊を研究して到る處に、人の精神は一般に信ぜられて居るものよりも遙かに複雑なものであるとの斷案に達せざるを得なかつた。人格、自我などと稱せられて居るものは在來の哲學又は一般人の信ずる如く單一、

隱微な現象

千里眼の事實

不可分の一個の體ではなく、複合的及び流動的のものである。催眠術に於ては、施術者の命令に依り、思想も感情も記憶も悉く遮斷して、同一の被術者に全く異つた人格を表はすことが出来る。ヒステリー患者に就て見るに、數多の異なる人格が患者の平生の人格を取巻き又は苦めつゝあることを知る。又催眠状態、夢、幻想などの場合には、精神の活動が極めて敏活になり、普通の状態に於ては久しく忘却して居た記憶を回想することが出来る。のみならず其出來事に遭遇した當時には意識的に認めなかつた事柄が此状態に於ては詳細に明瞭に思ひ浮べることが出来る。尙ほ進んでは人が未だ嘗て外部に言ひ表はさなかつた思想感情をも知り、又は遠國の出來事をも何等の通信もなく、然も正直に感知すること、恰も肉眼に見えない電線が之れを報ずるとまで思はれることがある。以上の如き諸現象は果して如何に説明すべきものであらうか。

此問題の提起する、や、心象研究者、心理學者、精神病學者等は諸方面から多種多様の解答を試みた。然しながら最も人の注意を喚起し、最も議論の中

心點となつたのは、此問題の提出に多くの努力を費し、而して其解決に一生を貢獻したフレデリック・マイヤース氏のそれである。彼れの意見はまだ廣く大方の承認する所とならないが、七年以前に公にした彼れの『人の人格及び其肉體の存續』には、彼れの『所謂サブリミナルセルフ』に關する最も注意すべき意見が述べてある。

超自然の働き

病氣の場合には人格の變化し及び分裂すること、人格の働きは常に或る一定の範圍内に限られて居る事、然も時々超自然的とも思はれる偉大の働きを表はすこと、斯る精神的の諸現象を廣く觀察してマイヤース氏は此處に有力な斷案を下した。即ち吾等が普通に考へて居る自我なるものは、私自身かと云ふ時に頭の中に浮ぶと我と云ふ觀念は——一層大なる自我の一片に過ぎないこと、恰も催眠状態にあるもの及びヒステリー患者の副人格が彼れの日常の人格の一片に外ならないが如くであると論斷した。而して彼れは一方に於ては此の一層大なる人格即サブリミナルセルフの天才の發動や偉大な思想の思ひつきや、或は難局に遭遇した時、人が自ら

潜める自我

夢想だも爲さなかつた大事業を容易に完成する等の作用ありとし、又他方に於てはマイヤース氏はサブリミナルセルフ固有の能力として一人の精神を他人の精神に傳へ、而して適當の時期に達して其れが普通の意識に表はれるまで受納し保存する作用ありと説明したのである。彼れは曰く、予は普通の人格以外にサブリミナルセルフの存在を主張するもの、其は決して相並んだ二個の人格が各自に存在して居ると云ふのではない。予の所謂サブリミナルセルフとは常に識域以下な、謂はゞ天上雲深く鎖された自我を意味するのである。而して此等の一見獨立せる如く見ゆる意識上及び意識下の觀念團は互に共働するに止らず、識域下の觀念の消長變化によつて人格はあらゆる種類の變化を爲し得るのである。随つて表面以下にあるものが時々又は永久に互つて表面以上に表はれることがある。それ故吾々の平常認め居る自我は其實皆一層大なる自我——一部分は表はるゝも有機體に制限せられて全部は表はれ得ぬもの——の一片に過ぎないのである。

マイヤース氏の學說中最も科學者の反對を招いた點は最後の一文である。今日一般の科學者若しくは心象研究に心を向けて居る科學者は精神の意識的活動と共に副意識的活動の存在を認め、而して後者の研究も前者のそれと同様に必要なことを知る。然しながら吾等の平常の自我を目して「有機體に制限せられて全部に表はれること」の出來ない一層大なる自我の「一斷片」とする見解には賛成しない。随つて一度此肉體的桎梏の除かる、や此大自我は全く表現さるとの解釋には愈々反對するのである。然もこはマイヤース氏に取つて極めて明瞭疑ふべからざることであつた。

### 第四章 生靈死靈交換術

死後の人格

人格の本性の研究と相違んで、彼れは肉體死後の人格の存續問題に眼を向けた。彼れ及び一派のものに取つてはこは最も重大な問題であつた。彼等は一度思想傳達の事實を證明し得た時には一層大なる希望を以て此問題に臨んだ。蓋し肉體の死後に靈魂が存續するものならば肉體中にあつ

てすら互に交通せしものが、それを離れて後も生存して居る友人等と交通し得ぬ理由はないと考へたからである。而して愈々彼の世から此の世へ通信があつて、其の通信が慥なものとして證明されたなら、問題は解けて仕舞つた譯である。

椅子空中に飛

此に於て再び降神術の上に研究の眼を注いだ。然しながら若し人格の同一の確證を得やうと欲するなら所謂純物理的降神術は此目的に向つて何等の寄與をなさぬことは、以前の實驗に依つて彼等の充分覺知する所であつた。椅子を動かしたり、机を空中に浮ばせることは精神の作用であるか、或はまだ研究されない一種の實質力であるか、其の何れが眞實であるにせよ、直接當の問題には關係がない。タニエル、ウエブスター、又はスウィーデンブルク、又はナポレオンといつて椅子や机を動かしたにせよ、其れが果して眞のウエブスター、スウィーデンブルク、又はナポレオンといふ證明にはならぬ。英米の心象研究者は純物理的の降神術を演ずる媒介者を捨て、言葉又は文字に依つて他界の音信を通ずると云ふ所謂「自動談話者」「自

働記者の研究に向つた。

千八百八十五年にキリアム・シエームスの推薦に依つて表はれたレオノラ・パイパー以來、此方面の研究は全く面目を一新した。シエームスは亞米利加心象會の一員で、殊に同會の設立に向つては少からず盡力した人である。亞米利加の心象研究會にもフリーツプ・フルックス、カーネル・ヒツギンソン、アンドリユー・ホワイト及シエームス教授、ニユー・ユーム、ランゲレ、ロイス、ピツカリン、グレイ、ジャストロー等の諸名士が會員となつて居る。

靈魂交通の有様

シエームス教授はパイパーの正直純粹なこと、彼女が未だ説明されない一種の力を有すること等を英國の會員に報じた。シシキツク、マイヤース及び其他の會員も始めは之れを信じなかつた。然しシエームス教授の執つて動かない所より、此方面に極めて堪能の稱あるドクトルリチャード・ホジソンを米國へ派遣することとした。ホジソン氏は綿密な注意と巧妙な方法を以てパイパーに諸種の實驗を試した。僅かの欺瞞の點も見えぬ上に、彼女の語る所が餘りに事實と符合する

思想傳達力と靈魂力説

所より遂に自分一個の判断に決し得ずして、共にパイパーを本國に伴れ歸つた。英國に於ても協會員の嚴密な監視の下に幾多の實驗は反復された。其結果多數の會員は今迄の疑惑を放抛して、漸く死後に人格の存続と其交通の可能を信じ始めた。中には彼女の語る所を以て何處までも死後に存続する人格の取次を爲す者ではなく、思想傳達の方法に訴へて、生けるもの、精神を讀むに外ならないと主張するものもある。ホジソン氏は猶ほ幾多の實驗と觀察とを積んで、遂に千八百九十八年に、パイパーの爲す所は單に思想傳達の原理を以ては説明することが出来ない必ず他界の靈魂より通報に接するものと考へざるを得ないと公然發表した。次いで二年後にヒスロツプ教授も此れと同様の意見を發表した。斯の如くして心象研究者は、パイパー其他のメデアムムの爲す所を以て思想傳達の力に依つて説明せんと欲するものと、靈魂の力を以て説明せんと欲するものとの二派に分れ、今日まで激しい爭論を續けて居る。米國の心象研究は重にヒスロツプを中心として活動する所より靈魂説を採用する

傾向が強い。英國に於ても順次に此説に改宗するものが多く、一般より云ふて、思想傳達の主義を取るものが敗亡の傾きが見へる。然しこれを以て直ちに協會の意見として此靈魂の力を認めることは出来ぬ。協會の意見としては單に思想傳達の事實を承認した以外に未だ何等の確實なる斷案にも達しないのである。

副意識の研究

吾人は此處に一言會員諸氏に向つて注意したきは、彼等の餘りに降神術の研究に走つて、副意識の研究を閉却したことである。此閉却は固より一時の現象に相違なからうが、吾人は一日も早く第二のマイヤース及び第二のガ―ネーが表はれ、彼等に刺激獎勵せられ、此方面に有用な研究の現はれんことを欲するのである。

以上吾人は心象研究の起源、發達、其實用的効果及び現今に於ける狀況を概論した。今よりは心象研究者の多數殊に其の著名な人々をして肉體の死後に於ても人格の存續を信じ、此人格と吾人との交通の可能に就て、科學的證明を得たとまで絶叫せしむるに至つた。出來事の抑も如何なるものなる

やに就て出來得る限り章を改めて明瞭に説明しやうと思ふ。

第五章 人體物體空間浮動術

妖怪の顔が現はる

先づ上述の現象は物理的と心象的との二種類に區分することが出来る。物理的現象とは、例へば机が獨り手に動いたり、何處ともなく奇異の音を發したり、又所謂妖怪の顔や形が現はれたりすることである。時には机が空中に浮び、進んでは同席者も又メデアム自身も或一種不思議な力に依つて空中に釣り上げられることがある。然しながら物理的現象にも幾分の心象的要素は包含されて居て、兩者を全く區別することは出来ない。メデアムが暗中に發する言葉の中には死者の心を取次ぐものもあり。又た空中に懸垂せる喇叭が死者に代つて語ることもある。然し大體に於て物理的現象は何等の目的もなくして起るもの、専門語で所謂ポルターガイスト式に屬するものである。ポルターガイストとは人を苦しめ、驚かしめ、怖れしめん爲めに、滅茶苦茶に物を投げ散らす所の眼に見えない妖怪であ

悪魔に憑れた少年

る。  
ホームは今より二十五年以前佛蘭西に於て死去した。予の考ふる所では彼れはユーサピヤに比較して其能力が遙かに勝れて居つたユーサピヤの演ずる所は誠に驚くべき奇術であるとは云へ、之れをホームの其れに比較する時は頓に其光を失つて仕舞ふ。ホームは百五十一年彼れが十七歳の折、或日幼少の時から自分を撫育してくれた伯母と共に食卓を取圍んで朝飯を喫しつゝあつて、奇異な音や響を發した。伯母は非常に驚いた。僧侶は依頼に應じて幾度かホームに取り憑く悪魔を祓はうと努めた。結果は總て無益であつた。伯母は遂にホームを放逐した。

然しながら彼れの奇術は間もなく諸人の歡迎する所となり、メデアムとしての彼れの名は米國全土に擴がつた。彼れの前にあつては、椅子は激しく前後に滑り、机は顛覆し、又は床より上つて數分間は空中に浮動した。或時ホーム自身も何物にか吊し上げられ、靜かに天井まで運ばれた。フライヤントとウエルスの出席した實驗會に於ては其の實驗場の床は恰も地震

机上のコップ動く

の場合に於けるが如く震動し、謂はゞホームの前には引力の法則も自由に左右せられる觀があつた。

千八百五十二年にチャトレス、ハートリツチの宅で開かれた降神術の模様を出席者の一人が下の様に書いて居る。「机の上には紙と鉛筆と二本の蠟燭と水の入つたコップとが並べられた。先づ第一は机は激しく動かされなければ、其上にあつた所の此等の物は一定の場所に靜止して少しも動かない。次に机は傾斜し始めて三十度の角度に達したにも拘らず其滑かな面に載せられてあつた品々は依然として前の位置を占めて少しも動かさなかつた。次に吾々は、机は同一の角度を保つて居ながら、其上の鉛筆のみが滑り落ちるやうにと要求した。間もなく註文は實現せられた。次にコップが滑り落ちるやうにと要求した。而して同じくコップは滑り落ちて出席者の一人が此れを手にとつた。

## 第六章 靈魂世界現出術



千八百五十五年、ホームは歐洲人士に靈魂世界の實存を見せしめん爲め英國に渡つた。米國と同様に所々に歓迎せられ、科學者、文學者、政治家、實業家、貴族より女王王に到るまで喜んで彼れに貢物を爲した。彼れは立派な人士を、單に保護者としたのみでなく、又た友として得た。露西亞に於て彼れは或貴族の令嬢と結婚し、而して結婚の際に於ける新郎の從者としては詩人として有名なアレキシストルス、トイ伯と皇帝の侍從の一人なるボプリンスキー伯とがあつた。

アイルランドの或古い寺院で開いた降神會では、其地のロード・ダンレーウと其子のアデヤ子爵とウインネ大佐の三人は慥かに一箇の幽靈、少くとも一個の影の如き形がホームの傍を歩いて行くのを見た。其幽靈が消え失せると同時にホームは彼等の方に進んで來た。然しながら床の上を直接に歩むのではなく、空中に浮び上つて、二尺位の高い壁に觸れず其の上の方にフラクとして居た。某々貴顯の面前で倫敦で開いた時にはホームは「心靈」に街道から七八十尺位の高さの吊上げられて一つの窓から出て他の

窓から這入るやうなことをした。

千八百六十九年の降神會の模様をヨード・リンドゼイは下の如く記載して居る。「夢幻状態に陥るとホームの身長が一尺伸びた。予は彼れを壁に押し當て、其身長を計つたがまだ満足出來無いので、彼れを室の中央に連れ行き、其前に燈火を置いて彼れの蔭を後の壁に寫して其れに記しを附けて置いた。目覺めた時彼れを壁に押し當て、又は中央に置いて燈火で照しても矢張夢幻状態に陥る以前と同様であつた。彼れは決して空中に浮びも又は爪先で立つて居なかつた。其場に居合せた一人の紳士は自分の足を以て彼れの兩足を床上に踏みしめて居たのである。」

キリアム・クルークス氏は千八百七十年から翌年に亙つてホームを専心研究し、數多の面白い出來事を記述して居る。或る時には机の上に置いてあつた一枚の板が獨りてに上つて暫くの間留つて居つた。而して恰も「海上の小波に浮遊する木片の様」に動いた。又時には、クルークス氏の持つて居つた手風琴が自然と鳴り始め、暫くすると依然として其鳴りを續けな

がら空中に浮び出したとのことである。斯る諸種の實驗中最も面白いものは次の實驗であつた。

燃手の電火を

『完全な夢幻状態に入るや、彼は机の傍にあつた燈火中に自分の指を入れた。普通の場合ならば勿論焼け爛れねばならぬ位の緩かな速度で動かした。次には立つて爐の傍に行き、熾熱せる木炭中より蜜柑大のものを取り出して、之れを右の掌上に載せ、次に左の掌で被うて臨機の竈を造り、吹いて益々火を盛んにし、火焰は立つて彼れの指を嘗め廻つた。斯る種々の現象を實現してキリアム氏は遂に今日までまだ知らぬ一種の存在を信ずるに至つた。近頃までは著名な科學者は總て此の意見を取らなかつた。然し今日に至つては、佛蘭西の天文學者なるカミールラ  
ンマリオン、シヤパレリ教授、ゲノア大學の病理學教授、ヘンリー・モーセリ  
及びネーブルス大學のボタツチ教授等の諸氏を合せて多數の人々が此意  
見を取つて居る。然し彼等が此意見に到達したのはホームの實驗より來  
つたのではなく、ユーサピヤのそれより得たのである。』

ユーサピヤの  
超自然力

ユーサピヤ・パラダイノは彼女自身の話に依るも、又彼女の熱心な研究者であつたロンフロゾー教授の記載する所に依るも、伊太利の一農夫の女で極めて卑しい生れである。千八百八十八年にネーブルスのチアイア教授に依つて彼女の一種不可思議な力を科學界に紹介せられるまでは甚だ憐な生活を送つて居つた。三年後には其名聲漸く世界の各地に喧傳せられ、次いで伊太利の重なる科學者を包含せる科學研究會は彼女に超自然的の力を認めた。其後歐洲各國に行つて其降神術を試み、數百の尊信者、改宗者を得た。亞米利加に渡つては、科學者の社會では彼女の希望に添ふ丈の信用は得られなかつたが、レコード破りの入場料を取つて莫大の収入を受けて居る。

### 第七章 幽靈飛動現出術

ユーサピヤの降神術を行ふ方法はホームとは其趣を異にして、降神室中に幕を垂れ一定の小房を限るのを常とする。而して彼女は其小房の前に、

机上の上に両手を載せて座して居る。其傍に又他の机を据ゑ、其上に數多の些細のものを載せ、而して一定の時期に達すると此等の物が獨りて跳ねたり躍つたりするのである。又其幕の間から奇妙な幽魂の顔や手が現はれたり隠れたりするのである。ユーサピヤの行ふ所はホームの如く或は身長を伸ばし或は空中に浮び或は火を攫むほどの驚くべきものではないが、然し他のメデイアムに比較すれば遙かに群を抜いて居る。紐育の降神會に出席したホール氏は下のやうに書いて居る。「ユーサピヤから二尺五寸位離れた所にあつた四百位の家具が二回持ち上げられ、遂には吾等の取圍んで居る机の上まで上つて来た。次には其家具が監視者の腕に沿ふて上つて来た。他の實驗の節には予の椅子が強く三回程小房の方へ引き寄せられた。次には殆んど轉げ落ちんまでに予の椅子は傾いた。然も監視者は嚴重に彼女の手足を拘束して居るのである。縦令彼女の手足が動いた所が大衆の注意を暗まして此れ丈の事を行ふのは固より不可能の事であらう。」

家具獨り動く

空中に腕が現はる

クルークスの記する所に依ると、ボストンの降神會には木板が恰も海上に浮ぶが如く空中に浮動した。室の幕は恰も大風に吹き捲くられるが如く動いた。机はユーサピヤの頭を越えて飛んだとのことである。彼女の熱心な研究者であつたロンブローゾー教授は昨年十二月公刊した著書中に無数の驚くべき出来事を記述して居る。或時ユーサピヤの周圍から澤山の手や腕が現れた。そののみならずして人の全身も現はれて、教授は其一人に確かに彼れの母を認め、チアア教授は降神室中に粘土を置いた所が、其れに顔と手とが現はれて居つた。モーセリ教授を始めとし其他多數の學者が集まつたゲノアの降神會に於ては三貫目餘の机が滑かに動き始め、其上にあつた節度計は誰も其れを動かしたものが無いに拘らず、其單調なる音を鳴らし始めた。次の實驗會には懸垂せる幕が恰も人が倚り掛つて居る様に膨れた。何故かとバルジニ氏は幕の中を覗いて見たが何物も見當らない。不思議に思ふて手を伸ばした所が誰とも分らない額が觸れた。頬が觸れた。進んで唇に達した時、其物の口は開いて彼れ

の手を噛んだ。

彼等の演ずる所が、机の顛倒や手足の出現に止るならば、吾人の最後の大問題即ち人格の死後の存続如何に就いては何等の解決を與へることも出来ない、其故英米を始め諸國の心象研究家は今日此の如き物理現象を去つて心象的現象の研究に向つて居る。心象的現象にも幾多の種類はあるが自動手記が最も信用を得て研究者は之れに依つて最後の大問題を決定せんとして居る。此方面のメデアム中最も名譽の高いものはバイパー夫人で、之れに次ぐものは英國の婦人、ホルテランド夫人、印度に住居す、フオープス夫人、トムソン夫人、バーラル夫人及び其女のヘレン、バーラル嬢である。此等の女子の自動手記を介して他界から諸種の通知が現はれるのである。殊に心象研究協會の四大家ガイナー、ジヂキツクマイヤース、ボジソンの死後は此等の人を名乗つて他界より通知の來るもの頗る多く、而して彼等は何等かの方法に訴へて、此世に生存せる會員諸氏に自動手記に現はれる所は決して思想傳達の理由より來るのではなく、靈魂より來るものであるこ

## 自動手記の妙

## 自動手記十年間の研究

## 靈魂の思想

とを明かに承認させ、兼ねて彼等自身の存在をも知らしめんとして絶えず努力する形跡が見えたのである。

曩に擧げた印度に住へるホルランド夫人は、或日『評論の評論』誌上の自動手記の記事を読んで自らも亦之れを實驗して見た。書かうと欲する心も、書きつゝあるとの知覚もなく、一切無意識的に然も意味ある文字が紙上に書き連ねられた。此の如くして彼女は十年間此方法を試みた。十年後の千九百三年にマイヤース氏の『人の人格及び其肉體死後の存続』を讀んで、熟考の末、自分の手を動かすものは、外部に存する『マイヤース』及び『ガイナー』と稱する二個の靈であることを知つて、以來此等二個の靈は交るゝ自動手記を介して長文の通信を寄せた。夫人は面白さの餘り一切の通信を一纏めにして、心象研究協會の探訪掛アリス・ジョンソン女史に宛て、此れを發送した。

ジョンソンは仔細に之れを檢して、此等の通信は明らかにマイヤース氏及びガイナー氏の知人に宛たものであることを知つた。然も精探する所に

依れば、ホルランド夫人は一人として此等の人々を知つては居ない。驚かざるを得なかつた。マイヤース氏が生前の友なるパーラル氏夫妻及び彼れが常に招待された食堂に就て記載する所は實に精妙を極めてあつた。且つ其町名番地までも誤つて居なかつた。殊に注意すべきは、夫人は元來羅典語と希臘語は全くの門外漢なるにも係はず、其通信文中には常にマイヤース氏の引用した希臘羅典の言葉があつたことである。

以上の記事はアツディングトンブルース氏の著書より抄譯したもので其記事は一言一句正確であることは事更に申上ぐる迄もありません。

## 第八章 交霊遠視遠聽術

ストックホルム駐在の和蘭の使節ルイマルトキルは千七百六十年四月二十五日に死んだ。其後久しからずしてエクローンなる人嘗て用立てた銀製の食器の代をマルトキル夫人に要求して來た。夫人は之は既に拂つた筈であると思つたけれども請取書を發見せなかつた。そこで名高いスエ

ーデンボルグに願つた所が、彼は死者と交通して勘定は既に死前七ヶ月前に拂つた之が受取書は上の室に在る筆筒の秘密な部分に在ると言つた。檢して見たら果してスエーデンボルグが言つた通りであつた。

スエーデンボルグは幽界との交通を爲すのみならず、又遠方に起つた事柄を能く同時に知ることが出来たといふ、千七百五十九年七月十九日(カントは其年の暮と記せども誤謬である)スエデンボルグは英國より歸省してゴーデンブルグに上陸した。其夕其地の或る商人の許の會に招かれたがやがて狼狽の顔色にて唯今ストックホルムのシウデンマルムに怖ろしい火事がある、と一同に報告した。彼は次第に火事の模様を語り、何處まで燃て何處で止まつたことを語つた。此報直に全市に廣がつたが、然し此火災の報知は二日の後初めてストックホルムから來た、而して全くスエーデンボルグが遠視した通りであつた。(兩市の距離は五十哩以上もあらう)

西歴千九百十四年の事、マサチューセツ州のマツクドウカル博士は、人間の靈魂の重量を精密に檢して一オンスの四分の三と云ふ事を確かめ得た、

博士は肺結核にて瀕死の状態に在る患者を寢臺の儘極めて精銳な秤上に載せ、佇立して静かに眼を注いだ、所が該患者の體量は其呼吸中の汗温濕氣等蒸發物の爲め、一時間一オンス即ち我八分餘りの割合で減じて行つた、三時間半を以て其肺病患者の靈魂は永久に其肉體を去つた、其死と同じ瞬間に俄然秤器は下降一オンスの四分の三だけ輕くなつた、一寸一匁あまり之が即ち靈魂の重量である事をマ博士は斷定しました。

### 第九章 摩訶靈怪鬼神術

北米加奈陀の東南隅にノバスコシア即ち新蘇國と云ふ所あり、カムバルラント灣に臨んだ小さな港町がある、其處にアメルストと云ふ一家に奇怪なる一現象の起つた事は、靈怪奇象界に有名な事實である、此事はデセルチス氏「心靈學講話」と云ふ書にも載せてある。

此家のチード夫人は一兄二妹と同棲して二妹は常に一室の同じ寢臺に臥する事にしてあつた、或る夜遽に小さき妹が寢臺の下に鼠が居るとて騒

ぎ出したので、隈なく探ねたけれども何事もなく、其の儘寢に就いた、其翌晩又もや同じやうに騒ぎ出したので、隈なく搜索不思議にも寢臺の下に置いてあるボール函が忽然と躍り出し、舞ひ狂ふて寢室の中央に止まつた、驚き呆れながらも故の位置に片付けたが、又もや飛び出した、姉妹も驚きて罵り合ふ聲に、何事が起つたかと其の兄がやつて來た、其時は最早静まつて何事もなく二女は寢に就いた、其翌晩寢に就くや例の小妹が大聲を揚げて、死んで仕舞ふと叫んだ、其體は見る／＼膨れ上り白のやうになつて、痛い痛い／＼と騒ぎ出し、驚いて醫師を迎へたが何等の功もなかつた、けれども膨は自然にひいて遂に静かに眠つた、然るに間もなく騒々しい音がすると思ふてゐる中に、霹靂電雷般々として非常なる物凄さである、一同眞蒼になつて静かに外を窺いて見ると、窓の外は星月夜で一沫の雲もなく誠に静肅であつた。

斯くて二晩三晩の中は何事もなかつたが、深更に及んで忽然寢臺をコッコツと叩く音が頻りに聞える、又其翌晩も妹がまだ起て居たが寢に就いた然るに妹の着布團が突然飛び跳ねて仕舞つた、又懸てやつたが何遍も飛

跳ねてしまふ、遂に精魂盡き恐怖の裡に其夜も濟んだ、其翌晩騒動は更に甚だしく何遍でも枕が飛んで仕舞ふので、寝られない、其際叔父に當る人が此騒ぎを見る可く其室に這入つて来た、處が其枕が飛んで叔父の横面にイヤと云ふ程叩き付いた、其の翌晩から三四晩が程は又々全身膨れ上がり苦痛に呻いて居た、此評判は其れから其れに傳はつて、教會の牧師カリエト神學博士もやつて来たが、手の着けやうもない、茫然たる折柄突然に壁に文字が現はれてた、(Father you are mine to kill)と云ふので、エスサアは其名前なんて即ち汝は予が殺さんとする者だぞと云ふのである。其後又此怪物は予は悪魔だ世の中を怒つてるのだと知らせて来た、更に又今度は汝の家を焼くぞと知らせて来た、其以來火の付いた燐寸が天井から降つて来て、夜具も敷物も焼ける、其の時は遂に消し止めた、此れからは段々とズウズウしくなつて、晝夜の別なく現はれて何度ともなく木羽に火の付いたのが降つて来て、其家は大半焼けた、重ねの出來事にエスサアは友人の家に預けられた、一ヶ月程は何事も無く濟んだが遂に此種の怪物が又々此家に於て續發す

悪魔の記せる文字

怪々妙々の靈

に至つた。

箒を持って掃除をして居ると、忽然其の箒を奪去られて、其れから空中を舞ひつゝ、エスサア目蒐けて突撃してくる、前掛の上に鐵針を載せて置いたら、其れが眞赤に熱して飛散して仕舞ふ、他の小供の有つて居るナイフが忽然鞘が脱けて、娘の背中へ衝刺さり鮮血は淋漓と出る、抜き捨てれば又飛んで来て元の痕の場所に衝通る、果ては水晶の文鎮が紛碎されて其の頭部を目蒐けて飛んで来た、室内にある靴が手毬の如く跳ね廻り、椅子は飛び卓子は躍る、臺所にあつた庖丁が飛んで来た、家屋が震動して大地震を起したり、火の氣のないのに新聞や雑誌の紙が焰々と燃上がつたり、あらゆる恐怖は現はれた、乍去此事の爲めに、西洋に於ける接神術方面に一新紀元を劃して今日に於けるが如く盛大を來すに至つたのである、昔巴比倫王の宮殿の壁に、其の王國の滅亡を示すべく手の先が現はれて、メネメネ、テケル、ウフアルシオンと書いたと舊約全書に傳へられて居る現象と同様の珍事があつた、斯る不思議の現象の現はるゝ理由如何之れ好研究題目である。

### 第十章 玄妙不可思議靈體術

スピリチズム  
の不思議

靈體術とは原名スピリチズムの事である。之れに就き英國の精神研究會に於ては、世界に其の名も高き大學者が集まりて之を研究し、奇々妙々の報告を公にせられた。我帝國東京大學の博士方も大に爰に注意せられ、英國の精神研究會の報告を好むて讀破せらる。靈體術の實驗は實に面白い。先づ室の中央にテーブルを置き、其の上にビールの空壘を置き、術者其の傍に立ちて手に二錢銅貨を握り、一、二、三、と聲を合圖に壘を目掛けて銅貨を投げ附ければ、カチンと音して銅貨は壘中に這入る。元より壘には何等の仕掛もない。壘の口小にして銅貨の入るべき物理學上の理由がない。二度び其の銅貨を元の手に戻すにはエイと一聲叫ぶと共に右手に堅く握りて一振りすると、カチリンと音して銅貨は手に戻る。次には同じ銅貨をテーブルの中央に置き、術者扇子を以て其の銅貨を扇げば、銅貨は片々舞うて蝴蝶の花に戯るが如し。術者アツと氣合をかければ銅貨は消えて跡なし。二度び術者扇子を

故元良博士の  
説

スピリチズム  
と靈體

開きて扇げば銅貨は又空中に現はれて片々たり、其片々は扇子を動かすに伴ふ。扇子静止すれば銅貨又静止す。静止したる銅貨を扇子を疊みて一撃すれば、碎けて無數の金玉となり、四方に散亂して消滅せり。此の實驗は手品にあらずして心理學哲學上の現象である。又催眠術上の幻覺錯覺の類でもない。先年文學博士故元良勇次郎先生が讀賣新聞紙上に於て靈體術の現象を述べたる所を抄出し次に示しませう。

『心と云ふものは必ず身體に這入つて、身體に依つて仕事をすることは通常の心の作用である。所がスピリチズムを主張するものは靈體と云ふものがある。と云ふので、日本でも昔から言つて居る所謂幽靈神靈と云ふ様な物で、靈體が身體の外に彷徨して居つてそれが或方法に依つて人類に通ずると云ふ。斯う云ふ思想であります。其の簡單なるものは昔から何處の世界にも在つた事柄で、それほど珍しいものではないのであります。併しながら近世の歐羅巴に於けるスピリチズム若くはスピリチュアリズムの研究は一種奇態なるもので殆んど我々解釋に苦しむ實に妙な現象であります。此



騒く幽霊

起りは六十年程前にあるので、それはどう云ふことかと云へば或る所に何か妙な音がする、何か戸を敲くやうな音がする、何處で敲くのであるか一向分らぬと云ふやふなことが初まりでありまして、其現象と云ふものは段々人の注意を惹くやうになつて、終には其敲き方が變つて來て机の下に音がする、問を發すると問に應じて答へると云ふのは、我々の如き言葉を以て答へるのでなくして然りと云ふには二つ、然らずと云ふには一つ敲くと云ふやうな電信の符號のやうなものに依つて我々と靈體が問答をすることが出来ること云ふやうな事柄を段々言ひ觸らすと有名な人が之に注意するやうになりました。

### 第十一章 靈力寢臺飛上術

靈體の働き

元故良博士曰く「スピリチズムが最も盛に行はれましたは先年の事で、一時は世界の有名な學者が寄つて色々之れに就て實驗をした事があります、其實驗の二三を擧げて見ますると、靈體がどう云ふ事をするかと云ふに、實に

寢臺飛び上る

敲く音に依つて、我々と思想を通ずるのみならず、種々の珍らしい事をする、例へば斯して話して居る中に、コツプが飛び上つて見えなくなる、暫くすると其コツプがどこからとも無しに飛んで來て元の所にかへる、それがコツプの如き小さな物でなく大きな寢臺などの一人二人の力で動かすことが出来ないものが、エライ音をして飛び出して部屋の中で飛び上つて見えなくなつて仕舞ふ、又暫くするとエライ音をなして歸つて來ると云ふ様なこと、今ライプチヒ大學の文學教授をして居つたツオルネルであるとか、現れを實驗して如何にも其の所以の説明が出来ないのには驚いた様子である。ツオルネルの如きは常に驚いたのみならず、其の事に興味を以て色々の實驗をなした實驗をしました、其實驗の一部を申しますれば、茲に箱がある箱の中に二つほど錢を入れて置いて、それをしつかり封じて仕舞ふ、さうして封印をして机の上に置いて、さうしてテーブルの下に石盤が置いて在る、さうすると何處からさうするのであるか、石筆が出來て來て石盤の上にシ

箱中の物品變

ユ一と音をさして字を書き、其字を書くことに由つて靈體が普通の人類と交通すると云ふことを彼等は主張するのである、それで暫らくさう云ふことをして居ると今度は其錢を入れて封印してあつた箱を開けて見るとも、う錢がない錢の代りに石筆が這入つて居る其錢がどうなつたのであるか、それから或時はツオルネルが自分自ら研究したのに、大きなテーブルの本の足で下の方で三本に分れて居るのがある、所が其處に一つの木の輪がある、其木の輪が誰が見ても割れ目も何も無い、シツカリした木の輪である、其木の輪はテーブルの上の面より小さいのである、それがどうかした所以かテーブルの足を圍んで嵌まつて仕舞ふ、テーブルの上を取らなければ嵌めることの出来ない輪が俄に嵌まると云ふやうなことがあつた、色々妙な事實がありました、がツオルネルが之を見て不思議として之に就て説明を試みたのである、一體空間と云ふことは之を西洋では三つの擴がり三つのダイメンションである、と看るのである、日本では六合四方上下に擴がつて居ると云ふ、之が即ち空間である、其空間に第四の擴がりを認めて机などの

三つのダイメンション

飛んで往つたときには、第四の擴がりに這入つて仕舞ふのである、と云ふやうな説を立てたので、世界の學者が一時は斯う云ふ説に耳を傾け非常に世人の注意を惹いたものであります、以上は故元良博士の説であり、信憑すべき事實であります。

### 第十二章 肉死靈生阿修羅術

印度サマチイ教の僧侶は、其階級を昇進するには、死亡して八日間以上土中に埋められ、後蘇生せねばならぬので、其實行の状態が、印度に三十年間も住居せる、英國の帝國醫學會員醫學博士プロイン氏によりて千九百六年五月號の「ヒンズースピリッツチュニアリズム」に紹介せられて居る、博士の親しく目撃したのは、ハードワフ祭に於て行はれたので、市街の一隅に於て先づ死亡すべき僧侶が化石の如き硬直の状態となりて公衆の前に立つと、位の最も上の僧侶が火の上に置かれたる大きな細長い器に一ぱいに溶解されたる蠟の満たされたるを持出す、次に五番目の階級に屬する僧侶が、硬直

生者數日間土中埋棺の實驗

になつて居る僧侶の耳、鼻、目等に蠟を注込み、後白布を以て全身を隙間なく巻たて、之れを細長い器に入れて居る溶解されたる蠟の中に八度漬け、蠟の乾きて透明となる迄繩で吊下げて置く、其の間に下級の僧侶が深い穴を掘り、其穴の中に埋めて仕舞ふのである。八日を経たる後之を發掘し、一團の僧侶が經文を唱へながら三度其周圍を廻ると全く死亡して居る僧侶がかつと兩眼を開いて蘇生するのである。その以後僧侶は自由に現世未來を往來する事が出来るので、種々なる奇蹟を行ひ一般の尊敬を受けるやうになるのである、八日間は最も短期なので、數十日間土中に埋め置くも容易に蘇生するとの事である。次に最も驚く可き實例を述べませう。

國王新術を親檢す

昔印度ラホールの一僧侶は、此術を最もよくし、大に土人の信仰を博した、然れども其國王は尙之を怪しみ、其は果して信なるや否やを親檢せむが爲め、殊更に該僧侶を召喚し、其術を示さむ事を命じた、然ると僧侶は心中竊かに思ふやう、國王にして、該術の信なることを感ずるに至らば、我宗教の益々盛大に趣く亦期すべきであると思ひ、異議なく之を了承し、六週日間僧侶我身

呼吸脈搏止りて死なぬ法

を生ながら土中に埋むる事を約諾した、依て國王は其城内に堅牢なる家屋を建設せしめ、其三方は密閉し、一方には小なる戸口を設け、室内には幅三尺長さ六尺の木製箱を埋め、既に準備整ひたれば僧侶をして法の如く眠に就かしむ、僧侶は坐禪の形をなし、全く無念無想となつた、其僧侶を箱の中に收めて國王自ら之に錠を下し、戸口にも亦自ら封印し、加之二小队の兵士をして晝夜警護せしめた、斯くて期日に至り、國王は場に望みしが、王は先づ封印を検するに、更らに怪むべき所なきを以て、戸口を開かしめ、室内に進入した、室の四面は、微苦を生じ、一種の臭氣を放ち、人をして思はず、肌に粟を生ぜしめた、偕て木箱の禁鑰を解くに方りては、祝砲數發を放つ等、其式最も嚴肅であつた、夫れより僧の從僕はリンネルの囊中にある軀體を箱の一方に倚らしめ、恰も印度佛僧の觀を呈せしめた、王は箱内を検せしに實に食物を與へたるの痕跡なく、次に從僕等は囊上より温水を注ぎかけた、王は其騙術ならむを恐れ、其囊を開かしめたるに、呼吸脈搏共に絶止し、軀體は厥冷して皮膚蒼白となり、宛然死像を呈せり、然れども肉體に腐爛したる所なく、纔に皮膚

四十二日間の生理

の皺縮せるを認むるのみである、夫れより再び温水を皮膚に灌漑し、又麥粉を熱湯にて練り寸厚となして頭顱に載せ、前後三回之れを反覆した夫れより鼻穴及耳孔に挿入せし綿と蠟とを以て製せる栓塞を除き、齒間に刃尖を簞入して、漸くに之を開き左手にて其閉闔を防ぎ、右手にて舌を引出した、但し放手すれば幾回も上方に巻回して咽喉を閉塞した、次にゼエー（牛酪を溶解せしもの）を眼瞼に塗布し之を開眼せしむるに、眼球は更に光澤なく、又移動する事更になし、巴布を更むること第三回に至つて甫めて搖扇を發し、四肢稍豐實となる、然れども未だ脈搏起らず、此際從僕は更にゼエーを舌に塗り、之れを嚙下せしむ、夫より二三分時にして眼球肌色略ぼ常に復し、遂に王に對して「尙ほ臣を疑ふか」の一言を發した、王は直に頸帶指環を與へて其否らざるを表示した、始め箱を開きしより、此の時に至るまでに凡そ半時を要し更に半時を経て、多くの言語を發するに至つた、而し未だ甚だ衰弱の状態を呈し居り、決して詐偽の所爲に非ざるを證した。

以上の肉死靈生の事實は今日の學理に照して見ると、自己催眠術の一種と

回生の模様

觀念により脈搏變る

神の靈顯を即座に現す法

思ふ自己催眠自己觀念によりて、自己の脈搏と呼吸とを止め、生理上に云ふ全く死の状態となし、而して後に覺醒したのである、普通吾々にても脈搏を變化せしむること、又全く自己觀念によりて脈搏を一寸位は止めることも出来る、呼吸又然りである、此現象の最も顯著なる現象であると思ふ、阿修羅とは天のことなり、人間が生きながら天に遊び、天の人となり、空氣も水も何等の食もなくして生存し得る大奇蹟である。

彼の植物の種子を觀に、種子にて何年貯へ置いても、後に之を播種すれば發芽し二度植物となる人間の生命をして其種子の状態となさしめしものかと思はる、併し其賢き信仰は宗教上の信念より得たものであつて、決して自己催眠又は自己暗示の結果であるとは、其僧侶は夢にも思はざりしものであると思ふ、

話は代るが今より數十年前、一の修驗者が信者を集めて祈禱をなし、而して其信者の右手に御衣を持たせ、左手に女の犢鼻褌を握らせ置き、修驗者が神を祈ると信者の右手は上行し、左手は下降して神の靈驗の顯著なるを證し

たりと云ふが、其れは今日の學理に照せば、信者の心中で御衣は有り難い、故に必ず上行する、犢鼻褌は汚いから下降すると確信して居る、故に其確信の通りになるので、自己暗示現象であると思ふ。

### 第十三章 幽霊寫眞撮影術

幽霊寫眞

抑も寫眞術が靈怪研究の道に利用せられたるは米國人ヤムラル氏が偶然に幽霊寫眞を撮り得たるが嚆矢である、一千八百六十二年ヤムラル氏其好む道として、頻りに某寫眞師の撮影場を訪うて、練習を重ねてゐる内、或る日の撮影に不思議なるかな、其映象面(乾板面上)に一種の朦朧たる物うつりを、之を焼きて見れば、粉ふ方なき「幽霊」なりしかば、我ながら痛く打驚き、尙屢屢試みしに、往々他の寫眞に見る可からざる幽霊の形迹あらはれたれば、時恰も交霊術の盛んなる時なりしを以て、遂に自ら幽霊寫眞師を以て任ずるに至つた。

神靈は固より然らんと欲せば何人の撮影する乾板にも其形を現はし得べ

亡妻の幽霊

しと雖も、特に靈媒力として神靈を媒介する力に富る人の撮る寫眞に最も善く其姿がウツリ出づる物である。ヤムラル氏は即ち靈媒力に甚だ優かでありまして、斯の如き破天荒の撮影を行ひ得たるに外ならぬ。ヤムラル氏が千八百六十九年紐育に移りて後、某紳士を撮影したるに、其亡妻の顔容彷彿として其の寫眞に上りしことは尤も名高い。但し破天荒の新説を唱ふ者は古來必ず迫害せらる、是十億の多數黨と反對に立ち、己は唯一人よるり成り立てる少數黨なれば勢ひ然らざるを得ない、果然ヤムラル氏は幽霊寫眞を偽造して世人を欺瞞せる者であるとして、詐偽取財を以て告發せられ、鐵窓の下に呻吟する身となつた、是に於てか他の名望家十二名陪審官として召集せられ、學者新聞記者等は参考人として出席し、實地の撮影は繰返され、幾度か現象は試みられたが、其中に不思議なる影像の乾板上に上れる者往々發見せられたれば、流石の検事も事實を否定すること能はずしてヤムラル氏は遂に無罪放免となつた。是れよりして幽霊寫眞は天下に喧傳し、歐洲諸國にも往々堪能者を出すに至つた、其期に乗じて偽造贋作現はれて世人

を迷はすものありしは惜しむべきである。

### 第十四章 男女精神交接術

精神感傳術

男女精神交接術は原名はテレバシーにして、精神交通術又は精神感應術と譯します。此術は次第に進歩して來り、近い將來に於ては、無線電信や無線電話は不用に歸し、人間は唯其精神に依て思想を他に傳へるやうになることは、不可能ではないと思はれるやうになつて來た。現に和蘭のザンチツヒと云ふ人の夫人は、子供の時から夫と同棲して居た間で、今では精神の交通は自在に行はるゝ様になり、夫が或事を思ふと、同時に其妻は夫が何を思つたかを知る事が出来るさうだ。此頃英米で之を實驗したが極めて良好の結果であつたと云ふ。それは劇場で行つたので、夫人は舞臺に立つて白墨を以て黑板に對し、夫ザンチツヒ氏は觀客席を廻つて、客から何でも構はず品物を出して貰ひ、暫く之を見詰ると同時に夫人は其物の名を黑板に書くのであるが、銀行手形の番號などでも夫がただ之を見詰め思念すれば、夫人は誤ら

千二百哩の遠方に思想通す

ず其番號を書くことだ。勿論ザンチツヒ氏は夫人の方を向いては居ない。又品物も無論見えないのである。或時などは或人が、兩人を自宅に招待して、夫人は階下の室に居らしめ、ザンチツヒ氏を伴つて階上の一室に入り、労働者の肖像を氏に示した。然るに階下の室に居る夫人はそれと同時に人の肖像と叫んだといふ。更に驚くべき例がある。米國のアンドリユーマツマンールといふ人は、或婦人と頻りに此精神感應術を練習した結果、今では其婦人が千二百哩の遠地にあつても其心を通ずることが出来る。と聲言して居る。

### 第十五章 遠隔者即感術

佛國ハーウルの教授ピールシヤネーと、ドクトルシベルとはよく遠方にある被術者に思想を通じ、遠方の人を催眠せしめた。之に就き名高い諸博士が立會ふて實驗したる成績を、英國の精神研究會にマイエル氏が報告したる所の一部を抄録すれば、一日立會人一同シベルの宅に會した。其時シベルは

遠隔催眠の大  
實驗

意思作用を以て自分の家より十町ばかり遠方にある一婦人を催眠せしめ  
 睡眠状態となし自分の家迄参らせる實驗を試みた其婦人の傍及び術者の  
 身邊に立會人は二た手に別れて附隨し實驗の時間は闇によつて定め豫  
 め催眠の時刻を定め又催眠術を施さるゝと云ふことを被術者に知らしめ  
 ずして自己催眠の疑なからしめた然るに婦人は睡眠状態となり家を出て  
 術者の家に向つて歩み初め中途にして引きかへして又己が家に歸り獨り  
 て何にか囁きながら家の内を立ちこちあるき居りしが二度び家を出て今  
 度は全く術者の家へ來た而して婦人は始終閉目した儘だ然るに途中にて  
 街路の燈柱や車等をば眼明きの者が注意して之を避くるに異らず途中を  
 急いで歩みしことあり又は止まりたり或は歩調甚だ遅れたることもあり  
 し術者は之を説明して云ふに婦人が始め中途迄出で、引かへしたる時間  
 と術者が己れの家に呼ぶと心力を集注して後忽ちにして之を止め他のこ  
 とを思ひし時と時間吻合し又再び己が家に來れと心力を集注すること強  
 烈なるときは婦人が道を急ぎたるときにして術者の心力が弱まりしとき

念力の多少と  
感應の強弱

と婦人が途を歩むことを遅々とせし時間と合して居る即ち術者の思想の  
 強弱は被術者に及ぼす感應の強弱と相伴なふ此事は念力の力を研究する  
 上大に参考とすべき點である此實驗は正確なるものにして世界に名高き  
 學者が證明した報告である。

### 第十六章 男女思想傳達術

男女思想の傳達は前に男女精神交接術として紹介したる靈象と原理も現  
 象も同一で在りて原名はテレパシーである次に其著名の實例を擧げませ  
 う。英國にバカリリと云ふ人が有りバカリリ氏の夫人は思想の傳達テレ  
 パシーがよく行はる今其實驗の一二を示さむに倫敦のサンシツグと云ふ  
 人の家で行つた實驗にサンシツグの妻君は夫の傍を離れて五六間も隔つ  
 た部屋の隅へ行つて壁に向ひ三人の方へは脊を向けて立ちましたすると  
 夫のサンシツグは椅子へ腰を掛けたまゝ卓の上へ石盤を取り出して右手  
 に持つた白墨でその上へ簡単な圓形を描きました。そして「用意」と云ひ

人の思想を讀  
む

思念したる數字を當てる

ますと、壁に向いた妻君は立ち所に「圓形」と呼ぶのです、それから三角、長方形と云つた風に三度續けて行ひました、がサンシツグの妻は、悉くそれを言ひ當りました。サンシツグは傍にあつた一冊の本を取り出して、「この本の何處でも開けて何の行でも宜いから指て突いて下さい」と云ふのです。云はれたまゝにバガリー氏が、中程の頁を勝手に開けて或る行を指すと例によつて「用意」といふ言葉が繰返されました。と間もなく彼の妻は今一冊の同じ本を持つて別室から出て来て、バガリー氏がサンシツグに示した頁と示した行を間違なく言ひ當てました。又千八百七十五年中に「書いた書片を目の前に突きつけられると、サンシツグは低い吐くやうな聲で、こゝは騒々しいけれど」と云ひながらじつと紙片の數字を睨んでゐました。すると不意に背後の扉が開いてバガリー氏の夫人が、「今實驗をなさいましたか？」と云ひながら驚いた風で石板を持つて來ました。見ると、その面には正しく「千八百七十五年中」と記してありました。小切手の上の文字と寸文の違ひもありません、然し不思議なことはバガリー氏は數字だけ

観客の問題を當てる

傳へてくれと頼んだのに「年中」と云ふ文字までが傳へられたといふ事です。又英國で有名な心理學者であるオリヴァー・ロットチ卿のサンシツグ夫妻に關する大實驗の發表があつた、其中に次の報告があつた、ある夏のこゝと、英國のバーミンガムの劇場で、サンシツグが公開の實驗を行ると聞き、ロットチ卿が友人と一緒に見物に參つた。折柄サンシツグの妻は、兩の目を厚い布で掩ふて舞臺の上に立つてゐた。そして夫のサンシツグは花道を歩きながら、観客の差し出すいろ／＼のものを手に取り上げて、それを不思議な力で妻君に傳へてゐるところで、した、観客は帽子や、手巾や、手袋や、なんとなふことなしに差し出します、サンシツグはそれを一々手にとつて「これは？」と云ふと舞臺の上の妻は、帽子、手巾、手袋」と云つた風に間違ひなく言ひ當てゝゐました、それが濟むと、また一人の観客が、懐から財布を取り出して、サンシツグの手に渡した、その瞬間、彼の目はふと平土間の後の方に外れて、そこへ今座を占めたばかりのオリヴァー・ロットチ卿の顔を見附けました。ロットチ卿はそれまで度々サンシツグ夫妻の實驗の席に列なつたこ



心を寫す鏡

指の觸れし所  
を當てる

とがあるの、彼はよくその顔を承知してゐるのです。さてサンシツグは  
 観客から受取つた財布を取上げて、前のやうに、「これは何に？」と云ひます  
 と舞臺の上にもた妻は、「オリヴァー」と答へまた、サンシツグは頭を横に振  
 りながら、「それは今私が考へてゐたことだそれではない、これは何に？」  
 と繰返して云ひますと、今度正確に「財布」と言ひ當てました、心靈研究會の  
 一員であるドウガル博士が面白い實驗をしました、博士は其處にゐる委員  
 の一人から、一冊の書物を借りて、サンシツグの傍へ行つてそのある頁を開  
 けて、中央の一行を指し示して其の儘書物を閉ぢました、無論サンシツグは  
 その書物に指一本も觸れませんでした。それから博士は衝立の一方にゐ  
 る彼の妻の所へ行きました、そして閉ぢたまゝの書物をその手に渡しまし  
 た。澤山の立合人は片唾を呑んでサンシツグの妻を凝視してゐましたが、そ  
 の時却つて苦心をしてゐたのは夫のサンシツグで、彼は兩手を額に當て、  
 非常な心的努力を試みてゐるやうでありました、すると約一分間も経つた  
 と思ふ頃、サンシツグの妻は手に持つた厚い書物のある頁をさつと開けま

した、そして正しく博士が指定した一行を指しました。

### 第十七章 人體磁力術

千里眼的磁力

歐洲の科學者を驚かしたる不思議なる磁力を人身に具へたる四人の妖術  
 家が、巴里に於て實驗した、先づ魔杖の力を示した巴里の科學者達は、此等四  
 人の妖術家に對して石掘場の堅坑と横坑分岐の模様を、千里眼にて透視す  
 べく要求した、其實驗は巴里附近のポアドソンセスに於て行はれたので  
 ある、第一に實驗者は勿論此等四人の妖術者も共に石掘場の内部を實見し  
 た事なきは勿論堅坑其他に就て精密なる知識を有せず、其試驗者たる市の  
 測量師ヴィル氏のみは之が知識を有せり、最初に又になつた柔かき榛樹の  
 杖を携へて實驗にかゝつたのは、頑張なる農夫フラフラア氏であつた、氏は  
 暫く其足に力を籠めて歩みづゝあつたが、やがて携へたる杖が少しく顛る  
 と見るや、忽然として立止まつて洞穴は此處より始まると叫び、更に洞穴は  
 十七ヤアド以上あり、全然乾燥して居る事を語つたが實によく的中した、此

坑の所在を當てる

について他の三人の妖術者も、夫々鯨骨竹及び銅の杖を以て、他の三つの石坑について同様の實驗を行ひ、殆んど其坑の深さまでを云ひ當て、最後のアロプス氏は四個の分坑の地位までも之を大體に指示することを得た、測量師ウイル氏は即ち市用の地圖を開きて一々實驗の成績を嚴密に審査したのであるが、四人の實驗者の答ふる所は、堅坑の地位四個の分坑の所在から坑の深淺に至るまで殆んど正確であつた、かくて最後に魔杖の實力を審査するが爲に、プロオプス氏は眼隠しを行はれて實驗を試みたのであつたが、其結果は以前に於けるものと殆んど同様なものにて、頗る驚くべきものであつた、けれども更に驚くべきことは實驗者フモン及びマジエの二氏は彼等の所謂天賦の磁力を示さんとして、普通の羅針盤の上に其手を置いたのであつたが、恰も吾等が一個の磁石を以て羅針盤に對する際の如く羅針盤の針は極から極へとくるく自由自在に飛び廻つた。

羅針を念力で動かす

以上各章に涉りて述べたる不可思議の現象は、如何にせば之を起し得るか、神佛は絶對萬能の力を以て居る、故に宇宙間の事は何事でも神佛の力にな

靈象術發現の修養

し得ざることはないと思ひます、依つて人間の精神をして神又は佛の精神に向上せしむれば、必ず以上列舉せる現象を現出し得ることゝ存じます、其域に達する修養法は「精神療法講義録」「高等催眠學」「催眠術寶典」全巻に涉りて述べある、其修養を真によく積まば、漸次其域に一步一步と進み行く事を得ると信じます、否、修業次第によりて前顯の現象よりも尙數百萬倍奇絶妙絶なる現象を起し得、哲學、宗教、教育、及び社會上の萬象に一大革命を興へ、吾人人間をして常に天國に遊ばしむるの觀を得せしむること、全然空想のみに非ずと信じ、私は其處迄努力せむと、日夜苦心慘澹せる者である、讀者も又此の抱負を以て研究せられむことを切望するものであります、本書を結ぶに當り特に申し上げ度き點を一言申しませう、既述せる内に自動書記を研究する丈に十年の星霜を費した學者があり、又此書に記載せし諸實驗の報告書は何れも大學校の教授とか、一世に秀でたる大學者にして、信賴すべき諸名家が數多立會ひて實驗をなし、報告したのを集めたのであるから、其報告を輕視せんとする人若しあらば、非常の僭越であります、夢

自重自尊の要

夢輕忽に看過してはなりませぬ之に就ては慎重の研究を要すると云ふことを力を入れて言ひたひのであります次に實驗は自動書記一つでさい十ヶ年を要したとあります故に小冊子を読み二三の實驗をなしたるに過ぎずして直に妄評し斷定するが如き輕忽に流れぬ様にしたいものであります又斯る不思議の事を主張するものは山師かなぞの様に思ふ人があるも其れは大なる間違ひであります之が諸奇象は非常に高尚なる學術上の諸現象であつて之を論じ之を解決せんとする人は大學者大研究者でなければなりません讀者は此意を以て大に自重自尊して益々之を深く研究し其堂奥を究められんことを希望して止まざる次第であります擱筆に際して讀者の健康を祈り將來を祝福します。

# 生靈死靈術 終

## 西洋按摩術 (一名マツサージ療法)

醫學士 志賀光明 講述

### 第一章 緒論

マツサージとは西洋按摩の意義にして、古來より我が國に行はるゝ按摩に比して、其の方法を異にす、日本按摩は多くの場合に於ては、單に疲勞者に快感を與ふるに過ぎず、必ずしも治療を目的となすに非ず、如何とならばマツサージは筋肉按摩にして、日本按摩は神經按摩なり、故に前者は求心性にして後者は遠心性なり、換言すればその手術方法は、全然正反對なり、本書に講述せんとするは求心性按摩の方法作用及び治療法等なれども、そは各論に譲りて本章には、求心性及び遠心性の區別及び効價の比較等に就き、略説せんと欲す。

西洋按摩とは何ぞや

神經按摩と筋肉按摩の別

血液循環の正不正と疾病

新陳代謝の意義及び目的　これに科學的の解説を下せば決して單純なる者に非ず然れども平易に云へば例を擧ぐるに如かず即ち五十錢の物品を買ひ之を更に一圓に轉賣すれば五十錢の利得を見るべしこの例に於て轉賣なる行為即ち作用が新陳代謝に外ならず而して五十錢の利益は吾人の財産にそれだけの増加を生ぜしなり。故に口より得たる食物中に含有せらるゝ滋養物質が糞便となりて體外に排泄せらるゝ時に含まるゝ滋養物の量大ならば其の差だけが吾人の身體の養分と化するなりこの作用を新陳代謝と云ふ而してこの新陳代謝は實に血液の作用によりて養分を運搬せらる故に血液の循環の正不正は直に新陳代謝に重且つ大なる影響を與ふるや論を俟たず日本の固有按摩は神經を刺戟して血行作用を盛ならしむるなり故に間接的なりこれに反してマツサージは血管そのものを壓しつゝ筋肉より(毛細管より)靜脈となりて心臟に歸へる速度を早からしむるなり故にこれは直接に血行を整へるなり。上述の如く按摩はこの作用のために行はるゝを以て患者の身體を裸とすべし決して古來より行はるゝ

求心性按摩と遠心性按摩と

末梢性按摩

が如く衣服の上より手術すべからず。次に求心性按摩とは如何なる方法を云ふやと云ふに文字の上にて知らるゝが如く中心に向ひて所謂もみ上ぐるなり則ち血管の中心は心臟なり故に靜脈血を次第に中心へ送りやる然らば靜脈血は心臟より更に肺に至りて動脈血となりて心臟を経て全身に分布す心臟の位置は左方胸部の乳房の下部にあり依て四肢又は胴部よりこの心臟へ向ひ揉み進むべし。次に遠心性按摩は古來より我が國に行はるゝ者にて末梢性按摩とも稱し前の求心性とは正反對なり即ち神經の中樞は多くは脊髄にあり故に例合は上肢に於ては肩胛部より指頭の方に向ひ揉み下ぐるをよしとなす然れどこれは上述の如く遠心的なれば間接に神經を刺戟して血行を促すなり即ち疲勞を醫するの効あるも決して疾病の治療には重大なる効なきものとす。現時醫學社會に於て主として賞用せらるゝはマツサージ即ち求心性按摩なりされど醫學の原理に従ひて行ふべし向ふ見ずに行はゞ何の効なきのみならず却て大なる害を與ふるを思はざるべからず。

**マツサージを行ふ時の注意** 日本按摩の如く單純なるものにあらざれば、充分なる注意と治療者としての責任とを思はざるべからず、茲に記さんとするは主として手術上の注意にして、實に三ヶ條あり、一々忘れざる様にせよ、如何とならば不注意なれば大なる害を患者に與ふるなり、左に之を列記せんとす。

**(一) 患者を安樂なる位置に伏せしむべきこと**

患者を横臥せしむるを賞す、如何となれば下肢の如きは、心臟に遠きのみならず、血行の速度が少なるを以て椅子又はその外の物體に腰をかけしむれば横臥せし時の如く血行の速度早からず、故に安樂に柔かき床の上に臥せしめて手術すべきは論ずる迄もなき事なり、上肢の際には坐せしめよ、是下肢の時とは正反對に、上より血液を下らしむれば、速度大となるを以てなり。

**(二) 剃刀を用ゐて皮膚面の毛髮を剃り去るべきこと**

生長したる男子は多くは下肢に毛を生ぜり、或は時に胸部にもある事あり、これ等の毛を剃刀を用ゐて丁寧に剃り去るべし、如何とならば手術のため

に毛根部に熱をもち、遂に毛囊炎を來して害を及ぼすことあるなり、斯の如き例は往々耳にする所のものなれば、決して輕々に見逃すべからず、と云へば世人或はこれに反對して、僅に一回のマツサージを行ふに何ぞ斯の如く、一々毛を剃り去るの用あらんやと、これ人を賊するの言辭のみ信ずるに足らず、何となればマツサージは世人の信ずるが如く、効もなければ、害もなし、的の云は、毒にもならねば、藥にもならぬもの、に非ず、行ふにその適所を得ば、重大なる効ある代りに、その方法を誤らば、害をなすこと大なるものなり、且つ患者は自個の疾病を醫するに、僅に脚部又は胸部の毛を剃り去る位の事は、何てもなき事ならずや。

**(三) 患者の身體を裸出すべき事**

古來より我國に行はるる、日本按摩は單衣又は下着の上より手術を行はしむるの習慣なり、と雖も、マツサージより見れば、決して單衣たりとも着用するを許さず、如何とならば、着衣の上より手術する時は、費したるだけの力は、皮膚面に及ばず、且つ勞多くして効少きに終らんのみ、故に患者をして安樂

第二章 マッサージの方法  
なる位置に横臥せしめて、適當の室温を保たしめて身體を裸出せしむべし、然る時は手術者の加へたる力と同價値の作用を患者の皮膚面に加へ得べければなり、若し着衣にして硬き時は、却て皮膚面を摩擦して、充血を來して害を貽すに至らん、故に右の理由より患者に着衣を許すべからず。

### 第二章 マッサージの方法

マッサージに用ふる方法を分ちて七種となす、輕擦法、強擦法、揉擦法、叩打法、壓迫法及び振顛法と更に關節に於けるマッサージを加へて説かんとす、而して本論に入るに先立ち、手術者に缺くべからざる四個の條件あり、故に先づこの條件に則りて、自分自身で治療者としての價値を有せるや否やを檢せざるべからず、然らざれば、勞多して効少きに終るべきや、明なり、但し余の次に記するは相對的の者たる事を忘るべからず、依て多少の取除けもあるなり。

(一) 手指が柔軟にして且つ華奢ならざるべからざる事

手指柔軟ならずして硬直なるは、指頭をして充分なる運動をなさしむるを得ず、或は時に局部に炎症を引起す事なきにしも有らざるべし、この條件により女子の手指を賞用す、但し下女又は其の他の勞働者は男子の如く手指は華奢ならず、斯の如きは不可なり、且つこの條件によりて考ふるに、堅き木片を用ゐて患者を壓迫するが如きは不可なるのみ。

(二) 俗に云ふ所の油手の者は手術を行ふべからず

但しこの油手と云ふは唯に石油又はその他の油の手掌に附着せるの意義に非ずして、脂肪の分泌多き掌を指して云ふなり。斯の如き人は手術を行ふに適當ならず、例令へマッサージを行ふ以前に、美事に洗淨するも手術中に、次第々と分泌を來すものなれば、矢張不適當なり。故にこの際如何なる處置をとれば、手術を行ひ得るやと云ふに、先づアルコールにて數回注意して、掌及び手指を洗淨したる後に、タルクと稱する藥劑(白色の粉末)を以て、掌等に丁寧に撒布せよ、然らば或は手術を行ひ得るに至らん。

(三) きめの荒き手又は粗糙なる指は手術に適せず

ワセリン必要の場合

手掌又は指のきめの荒きは局部に害をのこすこと少からず、日本固有の按摩にては斯の如きを重大視せずと雖も、マッサージに於ては兎に角、充分の注意を拂ふものなり。若し斯の如き手掌を有せる人にして、マッサージを行はんと欲するならば左の方法を守るべし、但これは一般に手指などの粗糙なる人が行ふも可なり、その方法と云ふは、ワセリンと稱する薬劑をば、指又は掌に塗りたる後、丁寧にその薬劑を布にて軽く拭きとるべし、若しワセリンを多く用ゐる過ぎたる時は、却つて又ラ〜として指端に力が入らず、滑り易くなるのみなれば、必ず適度に用ふべきなり。この薬劑は毒にならず安心すべし。

(四) 四肢の諸關節の完全なる運動を行ひ得べき事

マッサージは決して指先の業と考ふべからず、左右兩肢全部を働かしむるものなり、故に若し肩胛部、或は腕部の關節に異常、例へば疼痛ある時は、決して充分に運動するものに非ざれば、かゝる場合には、マッサージを行ふべからず。

輕擦法

以上の四條件は、マッサージを行ひて、患者を治療せんとする者の、先づ有せざるべからざる事實なり、若しこの一にても缺けなば、所謂骨折り損に終らん。次に上述の七種の手術方法を説明せんとす。

第一節 輕擦法

マッサージ手術の根源はこの輕擦法にして、次節以下に説かんとするは、實にこの方法に多少の變化を加へたるか、或は補助せしものたるに過ぎず、故に如何なる方法によるも常にこの輕擦法を併せ用ふるものとす、この方法は平手にて身體の端の部分、換言すれば心臓に遠き所より、次第に心臓に向ひ、押し行くなり。(心臓の遠き所より心臓へ押し行く事は、實にマッサージの根元なり、而してこの心臓より遠き所を末梢と云ふ)これは醫學上の學語なり、以下特に説明を加ふるの煩を避けんがため、茲に一言し置くなり。而してこの際、裸出せられたる體部と手掌との間に隙無き様、(即ち俗語にてピツタリと着けての意なり)にして、揉進むなり、若し體部と手掌との間に隙

手掌と體部を  
密接するを要  
する理由

ある時は、全然無効なりと知るべし。斯の如くなさる可らざるには重大なる理由の存せるなり、静脈(不用なる血液を清めんため再び心臓及び肺臓へ送り歸さるゝ血液を交通せしむる血管にて、皮膚の表面より見て青色を呈し、俗に所謂青すじと稱するものなり)は筋肉の内及び筋肉相互の間を通りて末梢より中樞に向ひて進む然るに静脈は關節部は勿論の事、到る所に枝を出して互に交通せり、今筋肉の一部を壓迫せばその部分の静脈管は壓縮せられて管内の血液を前後左右より排出すべし、更に加へたる壓を去らば、静脈管はその弾力性によりて故形に復す、然らば其の所に新に生じたる空虚を満たさんがため、則ち少き處へ高壓の部分より、血液を還流するに至る依て單に一部分のみを壓しなば、幾回手術を行ふも同一の血液が其の部分を出入するのみ、決して静脈血を心臓へ送るの効なきものなり。又筋肉の一部分を末梢より心臓に押し行くとするも、左右に排出せられたる血液は、直に手の後に歸り來るものなれば、この際にも亦何等の効價もあるなし。次に來る問題は如何にせば、マッサージの効を大ならしむるや、と云ふ事な

輕擦の五種

り。答へて曰はんに、静脈血をして獨り前方に進み心臓へ我れから流れ行く様にし、その後方よりは他の血液が次第々と續き來る様にすることを可とす、故に筋肉全體を心臓に向つて同時に押し進み、且つその周囲の筋肉も密かに押し行かざる可からず、然るに静脈と身體の各部に於ける筋肉との關係一様ならねば、一々説明せざるべからずと雖も、僅少なる頁數を限られたる本書に於ては遺憾ながら之を略せざる可からず、故に本書を讀むと共に解剖學及び生理學の一斑を明かにせざれば充分の効果を現はすこと甚だ至難なり。幸に之を諒せよ。以上輕擦法の大體に就て論じたるが更に之を詳記せんに、輕擦法も手の部分の異なるに従ひ次の五種に分つ。

(一) 手掌又は其の一部分に拇指球を以てするあり、之を指掌輕擦と稱す。多くは四肢に用ゐらる。

(二) 拇指の腹を以てするものあり、これ手足の指又は掌骨、蹠骨の間の如き狭き部分に用ゐるなり。

(三) 拇指を除き他の四指の端を並べて行ふものあり。即ちこれは腿と腿



との間の如き極めて狭き所に用ふるものなり(腿とは脚部背下部にあるが如き太きすじを云ふ、筋肉と骨との間を結つくる用あるものとす)

指擦

(四) 手を握りて其の中節よりなれる關節の高き處を用ふるものあり之を指擦と云ふ、皮膚の厚き部分にては充分なる壓を加へんには、勢この方法を用ふるなり、或は兩手の拳を並べて用ひ、殊に其片手の拇指を他の拳の中に入るればその硬さを増すこと大となる、足の裏にはこの方法が可なり。

(五) 第二指及び第三指の爪端にて軽く皮膚を擦り搔くなり、これによりて其の局部に反射作用を旺盛ならしめ、以て充血せしむるなり、この際爪は清潔なるべく且く長く伸ばすべからず、この方法は廣義に於ける輕擦法なれば、眞の方法に非ざるなり。

以上の五個の方法を幾回も施すべきものとす。而して撫で擦るに回数早さ及び加ふべき力の強弱等は之を用ふる部分と疾病とによりて一様ならず、而して特に注意すべき事は、この方法を行ふには必ず病のある部分の下

輕擦法の作用

方より、病竈のある部分の上を超え、更に少しく上方までも及ぼすべし。斯の如くせば皮膚より手を離して、以前の如くすべし、この時には、末梢より心臓へ向ふ事を忘るべからず。次に輕擦法は如何なる作用をなすやと云ふに、一般的より云へば、皮膚を刺戟して反射的に内臓の機能を變ぜしむるは、勿論の事なれど、従つて血管を廣げ血液の量を増し、以て營養作用を盛んならしむ。且つ靜脈血を心臓へ追ひやるを以て組織内に滞在せる舊物を一掃す即ち、新陳代謝をなすによりて、生活機能が旺盛となる。弱き輕擦は知覺神經を刺戟するを以て精神を愉快ならしめ得るの効あり。上記の如き作用を利用して治療上には左の疾病の時代に行はる。

輕擦に効ある病症

- ◎ ヒポコンデリー症
- ◎ 貧血状態に在る者
- ◎ 通利なきもの(腹部に行へば軟下劑を服用せし時に似たる便通あり)
- ◎ 鬱血(靜脈血一ヶ所に滯れる疾病)
- ◎ 水腫(水ぶくれ又は水氣と稱して例合ば脚氣患者の脚部の如き状態となる疾病)
- ◎ 余一個人として考ふる所によれば、或は腦充血又は腦貧血の場合に應用

せば効あるべしと思へど、未だ試験せしこともなければ、斷言する能はざるなり。以上の外に胃腸の消化を助くるに重大なる關係あるや明なり。

### 第二節 揉捏法

揉捏法を行ふ

輕擦法は平手を以て筋肉を下牀に向ひ壓し行くものなれど、揉捏法は之と異り、兩手を用ひ一方は拇指一方は他の四指との間に、筋肉を把り壓搾しつ上り、上行するものなり、患者をして按摩せしむべき筋肉の部分を、横位置にあらしめ、その筋肉の末梢端に略十字形に其の兩手を加へ、拇指と他の四指との間に、筋肉をその兩側の筋肉と共に把り、骨の面より少し擡起して鋸截狀の運動を以て上行すべし、但この際右手前に行く時は左手後に行くべく、右手後になる時は左手前は前にすべし、斯くの如く常に兩手が反對に運動するなり、この方法も第一章に述べたる輕擦法と同様に、手と組織との間に隙なき様にして、決して緩みあるべからざるは勿論の事なり。用は輕擦法と同様に組織内の液を中樞に向ひ弛出するなり、而して効は輕擦法よりも多き

皮膚と筋肉との揉捏法

ものなり。

揉捏法は軟かなる組織、例へば皮膚、筋肉又は腹部の如き所に行ふ、故に分ちて二種となす、即ち左の如し。

(甲) 皮膚揉捏法 皮膚及び皮下靜脈に作用する者、  
(乙) 筋肉揉捏法 主として筋肉に作用を與ふる者、

(甲) 皮膚揉捏法は片手又は左右兩手を用ひ、拇指の腹と人示指及び中指を添へて、其の第二指骨の腹との間に皮膚を撮み、皺を作りつゝ、漸次下より中樞なる心臟の方向へもみ進むべし、斯くて上部(四肢などにては)に達せば、更にその週邊に及ぼして皮膚全體を揉捏するなり、この際輕擦法と同様の心得を要すべし。

(乙) 筋肉揉捏法は筋肉の揉捏を目的とするが故に、次の如き五種の方法あり、場合に從ひ臨機應變の處置を取るべし、夫れ々、定まりたる規定は有るものなり。

(一) 片手又は兩手を用ひ、筋肉を深く且つ成丈け多く握りて骨より引離す

が如くして、その筋肉を拇指と他の四指とにて力を加へ、押し揉みつゝ、筋肉の方向に従ひ、末梢より中樞へ進み行くなり、これは四肢に用ゐるものにして、股の如き肥太りたる部分にありては握りたる筋肉を一度は骨より起し、一度は骨に向ひて壓するが如くすべし。

(二) 人示指、中指、無名指及び小指の腹を拇指球に向はしめ、其の間に握り之を押し搾りつゝ、下より上に向はしめ、其の筋肉の起る端に至りて止むべし、この方法は小兒又は細き手足に應用するなり。

(三) 拇指又は他の指にて筋肉を壓し。又は拇指と人示指とにて筋肉を撮み、骨と骨との間又は二指即ち拇指と人示指との間に於て、其の筋肉を壓しながら揉みて可なり、これは細き筋肉を揉むに便なり又廣き筋肉を揉む方法は如何と云ふに、拇指と人示指と中指との間に揉むべき部分を握り皮膚を動かしながら、筋肉を圓く動かすなり、これをホツプアー氏筋肉揉捏法又は二指揉捏法とも稱せらる。

(四) 手掌を用ゐて、筋肉の上に置き、力を加へて左右前後又は圓く輪狀に壓

ホツプアー氏  
筋肉揉捏法

しつゝ、揉むものにして、この方法は皮膚の廣き部分、即ち腹部又は背部に行ふべきものなり、これは容易に行ひ得べく、日本固有の按摩法にては特に、腹と稱せしものなり。

(五) 左右兩手を以て、恰も錐にて孔を木に穿つ時の如く考へ、兩手を用ゐて早く廻すなり、この際多小轉がす氣味に行ふべし、この方法は主として四肢に行ふ、又指の如き處は、拇指と人示指との間に撮みて轉ばすを、良しとなす。以上に記述したる五種の手術方法は、個々獨立のものなりと雖も、時々輕擦法をその間に挟むべし、又四肢を揉捏するに當り、手を用ゐて手術を行ふ時は、他の手にて之を支へ、左右手を換て交互的に用ゐるを賞用せらる、却説この揉捏法の作用とする所は、皮膚に行へばその生活機能を高め、靜脈の周圍を包める筋肉に行へば、筋肉が壓せらるゝが故に、血行作用旺盛となり、所謂新陳代謝の作用を増すを以て、その効力の點より見れば、輕擦法よりも遙かに勝れるものなるは云ふまでも無き事とす、この方法を行ひて効ある疾病は一般に云へば、貧血又は營養不良の患者又は組織の衰へて弱き者、腹部の

揉捏法の作用

揉捏作用は直接に胃腸の働きに作用して大なる効あるものなり。最後に特記すべき注意は、この方法を行ふ際に肘の關節を用ひず肩關節を使ふ時は、術者が疲勞する事の少き事なり、故に左右の兩手を大きく使ふべし。

### 第三節 強擦法

強擦法は重擦法と稱す、この方法は自然的の新陳代謝に任せては治癒せざる場合か、或は治する事は治するも長き時日を要するが如き場合か、などに用ゐらる。則ち病原のある所に生じたる病的産物を細かく碎きて循環系に入れ、不用物として體外に排出せしむるものなり。例へば溢血或は皮下滲出物のありたる時、その部分は腫れ上るべし、かゝる所に行ふ手術にして、これに二つの方法あり。

(一) 人示指を用ゐるものにて先づ右手の拇指を腫れ上りたる局部に近く置き、人示指はやゝ真直になして其の端を腫れたる部分の皮膚の上に付け、皮膚と共に其の指を左右前後縦横及び輪狀に動かして、皮膚の下に溜れる

強擦の二法

強擦法の作用

物を、押し碎き左手の人示指にて其の碎きたるものを、下より上に向ひて送り健全なる部分にまで及ぼせば、吸収作用によりてその無用有害物を血液の中に送り込むべし。但この際必ずしも下より上と限らず、健康なる部分に至らしめなば足れりとす、而して右手の人示指はその溜留物の周圍より初め、一部を終れば他の部分に及ぶべし、斯くして遂に中心に至らしめよ。

(二) 一定時間の間一の方法を行ひ、病理産物が細く碎かれ、血液中に吸収せられ易くなりたる時には、強擦法を行ひて中樞へ向け、その病的産物を送りやるものとする、則ち人示指又は更に拇指を加へて肢の長經に沿ひて擦り上げるなり、要するに病的産物を碎きたる後に、強擦法によりて初めて効を奏するものとする、この際被擦部は必ず固定して動かざらしむべし、動けば何の効もなき事になるものなり。

この方法は力を用ふる事大なるを以て、皮膚を擦傷し易し、故に手術の前後は少許のワセリンを塗るべし、この方法をなすには、指及び手の關節を強硬に保持し、僅に肘關節を動かし、而して主に肩關節を用ふべし、然かする時は

効多くして實にその勞少きものなればなり。  
 強擦法の作用は皮下に溜れるものを押し碎きて之を周囲の健康なる部分に分ち、その吸収を進むるものなれば、皮下又は關節内の溢血又は炎症に原因する滲出物などの吸収せられず溜れる時に行ひなば蓋しその効や少からざるべし。

### 第四節 叩打法

叩打法の五種

叩打法とは文字の如く叩打するなり而も強力を以てすべからず、速に且つ彈力的なるを要す、日本の固有按摩の叩打法は、やゝ強き力を用ゐて且つ彈力なし斯の如きは取らざるところなり然らば如何なる方法を用ふるかは、余の茲に説かんとする所なり。大略左の五種の方法あり、一々説明を下さんとす。

(一) 指端を集めて叩打するなり、是れ殊に頭部胸部などに用ゐるなり、又打診する時の如く、中指の端を少しく屈めて皮下なる神経を叩くなり、神経痛

の患者にありては、この方法を行はるゝものなり。

(二) 指背を以て行ふものにて、これを分ちて二種となす、曰く彈力的叩打法曰く變則的叩打法これなり。

(イ) 彈力的叩打法とは唯だ強くが如く指の背面にて打つものなり、この際肩の關節をのみ使用すべし。

(ロ) 變則的叩打法とは、手の小指を下にして横に立て、之を倒して手掌を上へ向かしむ、この際手背にて叩打する法なり、この二方法は背部及び臀部に用ゐらるゝものなれば、四肢などに用ゐるは稀有なり。

(三) 手の小指側を用ゐて打つものにて、切打法とも稱せらる、指を少しく開きて打つに當り順次に集むるなり、この方法は何處に用ふるもよろしきとは云へ、最も賞用せらるゝは、頭部後頸部及び四肢に行ひて効あり。

(四) 少しく回ましたる手掌を以て打つものにして、何れの部分にも行ひ得べしと雖も、殊に多く用ひらるゝは、胸部腹部及び背部なり。

(五) 手拳叩打法は拳を決して固く握らず、半拳として、やゝ太き棒を握れる

彈力的と變則的叩打法

切打法

手拳叩打法

が如き様子をなし之を覆はせて用ひ又は堅に小指側を以て叩打するも可なり、要は常に自然弾力的の叩打を行ふべきなり、主として肩胛部の關節のみを使用すべきは云ふまでもなき事なり。

叩打法の作用

叩打法の作用は、軽く短き手術時間にありては、血管を縮めて血の量を少くするものなり、若しこれに反し長時間の手術か又は、強き力を用ひたる時はその結果も正反對に、血管を擴げ且つ血液の分量を増加するを以て、その部分に充血を來すを見るべし、然るに若し叩打が長時間に續かば、或は血管の痙攣を來すことあり、故に充分の注意を要す、叩打法は主に筋肉の萎縮を治し、且つ諸種の神経性の疼痛を減ぜしむるの効あり、殊に皮下淺き所に存在せる神経痛の如きに効あるは勿論の事なり、故に次の諸疾病に主として用ゐらるゝなり、神経痛、痙攣、痲痺及び營養不良なる筋肉の部分に行ひて効能あり、その外この方法は一種の誘導法として用ゐるを得べしと雖も、それはこの方法の主用に非ざるなり。日本按摩に於ては肩の凝りたる場合に叩打法を強く行ふことは人のよく知る所なり。

第五節 振顫法

振顫法は素人には六ヶ敷くして容易に行ひ得べきに非ずと雖も、人の手に代ふるに一種の器械を使用せば或は可ならん、吾人はこの方法を習ひて、如何に速に手を動かすも振顫とはならず、吾人が物に怖れたる時に、手足の戦き顫ふが如き動作を振顫と稱するを以て、今其振顫方法を説かんとするも容易に行ひ得べきものならざる事のみを、了解せられん事を望む、振顫方法を分ちて二種となし解説を加へんとす。

振顫法の二種

(一) 平手振顫法、前膊を上膊に對して殆んど直角に曲げ、手掌を平に體面にあて、又は手術すべき部分を握りて振顫を行ふものにして、是れは腹部の如き廣き部分に用ゐて効あり。

(二) 指尖振顫法、前膊を上膊に對して殆んど直角にすることは一の如くし、中指の尖端を體上加へ精神を指端にこめて、自然に振顫せしむべし、この時には手はなるべく強硬にして肘關節より前膊全體を正調に振顫せしむ

振顫法の作用

べし、斯くの如くして、神経に直接に働かしむるなり。  
以上の方法は慣れたる術者にてても、疲勞するものなれば、素人は、容易にその域には達しがたかるべし、要は熟練にあるのみ。  
振顫法の作用は、筋肉の作用を旺盛ならしめ、神経の感ずる力を静め、又其の作用は、遠く血液循環器に及びて、心臓運動の數を減じ、血管を締め、尙ほ胸部の振顫は、肺の活量を増加すと云ふ、故にこの方法は、一部の痙攣、痲痺、神経痛、その外腸の蠕動運動を助けて、糞便排出に便を與ふ、但し最後の時には、腹部の振顫を要するなり。(則ち指尖振顫を行はざる可からず)

第六節 壓迫法

壓迫法を行ふ

壓迫法は一指又は多くの指にて皮膚下なる神経又はそれよりも深層にある神経叢と云ひて、神経の集合體を壓する方法なり、而して皮下の神経を壓するには、直接に皮膚に行へば可なりと雖も、神経叢を壓するには、皮膚と、その神経叢との間にある組織を以て、則ち間接に壓迫するを可とす、而してそ

壓迫法の作用

の壓迫に用ふべき力及び時間は、患部及びその目的に従ひて定むべし、時間に就ては後章に述べんとす。  
壓迫法の作用は、短くして急なる時は、神経を刺戟し、強く長き時は、神経を痲痺せしむ、又壓迫を加へて、血管を壓し、縮めて、血の量を少くし、以てその部分の作用を弱む、故に一部の痙攣、痲痺などに用ゐるを、良しとなす、この方法は、多く用ゐられず、如何とならば、その處置を誤らば、却つて有害なればなり。

第七節 運動法

運動法の二種

運動法は、身體の關節を動かすものにして、之に虚動と實動との別あり、次にその區別を詳にせんと欲す。

(一) 虚動法は、按摩術を施せる間、又はその終りたる後に於て、術者は患者の病める上肢又は下肢を取りて、行ふものにして、更に分ちて二となす、曰く、單成、複成、これなり、單成とは、術者が任意に動かすものにして、患者はその患部の處置を術者に一任せしめ置き、所謂なすが儘に動かすなり。複成虚動法

と云ふは、所謂反對運動法にして、單成の場合とは正反對に術者の動かすに抵抗するなり、これを分ちて二種となす、一は術者が患者に逆らふものにして、他は患者が術者に逆らふものなり。

(二) 實動法は患者自ら運動するものにして、即ち醫療體操とも稱すべきなり、術者先づ模範として例を示すべし、然る後に患者に行はしめよ、但しこの運動法と云ふは、決してマッサージとして説くべきものに非ずと雖も、ホツフアー氏が西暦一千八百九十五年に出版せしマッサージの方法と題せる書籍にも掲げあれば、余もその例に倣ひて茲に附屬せしめたるものなり。

この運動法を命ずる時には、術者は必ず力を平等にして決して衝突的なるべからず、又常に患者の力量を計りて、患者を過勞せしむる勿れ。運動法の作用はその効大なるが故に、一々茲に枚舉すべからずと雖も、要する所は血液の循環を旺盛ならしめ、従つて營養を増すものなり、殊に運動法は關節の運動を自由にし、弱き筋肉を強からしむるの効あるものなり、その外一般に按摩の目的に従ひて、効能を見るなれば、適當なる條件に於て行はしむべし。

### 第三章 マッサージ治療法

前章に於て讀者諸子の得たる、マッサージに就ての智識を利用して如何にマッサージを行ふべきかを本編に於て説かんとす、要するに身體の各部の按摩は如何なる風に行ふべきかを、茲に一々解説せんと欲するも、惜哉、紙數に限りありて、全部の説明を下すべきの餘地なし故に、余は次に最も必要なりと考ふる所の二三を説きて、本編を終らんとす。

(一) 輕擦法外四種の方法を應用して、マッサージを行ふ法、先づ筋肉關節、頸部、腹部及び全身マッサージの順序に説き進まん、とす、其の最初なる筋肉のマッサージは最も平易なるものなり、手掌を筋肉の上に當、拇指と他の四指とを分て、その筋の兩縁に沿ひ、靜脈の流るゝ方向に従ひて、輕擦法を四五回施して、更に三四回の揉捏法を混じり再び輕擦法を行ふべし、斯くの如く幾度も繰返すべし。

(二) 關節マッサージ、關節に疾病ある時に行ふものにて、その疼痛のある所



より少しく下より上方へ揉進む、(但この際は輕擦法なり)然る後には大抵痛みは減ずるを常とす、然る時に至りて關節部のマッサージに及ぶべし、即ち(イ)關節の前と後とに其の下より起して上に終る所の輕擦法を何回も行ひ、(ロ)次で關節部の周圍の凹みの所に強擦法を加へ、(ハ)再び輕擦法を行ひ、(ニ)その關節を動かし、(ホ)揉捏法を加へ、少しく動き得るに至らば、(ヘ)運動法を用ふべきなり、この運動法は先づ靜に單成虛動法にして次で實動法をなして反對運動を以て力を強むべし。

(三)頸部マッサージ、これは多く用ゐらるゝ方法にして、且つ必要のものなれば少しく詳細に説かんとす、如何となれば、頸部には大靜脈、大神經のや、皮膚に近く存在せるがため、その手術は直ちに重大なる關係を及ぼすものなり。

余の茲に述べんとするは、ホツフアイ氏法なり、この外にゲルスト氏、ワイス氏、ヘツフィンデル氏等の案出したる諸方法あれど、最近の者としてホツフアイ氏法をとるなり、然れども必ずしも他の三氏法を悪きとは云はざるなり。

り、兎に角、ホツフアイ氏法によれば、術者は手掌を頸の兩側に當正中線に沿ひつゝ、下るなり、人示指が喉佛の下の凹める部分に觸れれば、肩の骨の上を外方に向ひて摩擦して終るべし、ワイス氏は細き頸の人に、行ふに當り、手にワセリンを塗用し、左右の拇指を以て頸の兩側を摩擦せり、而してこの際他の四指は頸の後部にて合せ置くをよしとする旨を論じたりき、何れにもせよ、頸部マッサージの時に、患者の呼吸をして可成的安靜ならしむべし、而して舌骨の部分を押さる様にすべし、然らざれば呼吸を妨ぐる恐れあればなり。

(四)腹部のマッサージ、古來より按摩、按腹と云ひて、人の知る所のものなり、これは内臟特に胃腸に關係するを以て、不規則なる時は却つて害をなすものなり、故に詳細なる説明を加へざるべからず、腹部マッサージの効は、腹部の筋肉を強くし、消化液の分泌を促し、胃又は腸の蠕動運動を高め、消化及び吸収作用を旺盛ならしむるを以て、その利害の及ぶところは、決して區々たるものに非ざるなり、腹部のマッサージは、食後二三時間に於て行ふべ

胃部マッサージの法

し、且つ手術以前に放糞便するをよしとす、然る後に枕を高くし、股と膝とを屈めて可成的腹をゆるめしむべし、然らざれば腹筋が張りて、手の力は内臓に及ばざるの恐れあるを以てなり。

(一) 輕擦法、胃の部分、左の肋骨の部分、を弓形に輕擦法を行ふべし、腹の中部は右の手掌にて右の腰骨の角の内側より、臍の周圍を旋りて、輪の如くに輕擦し、上は肋骨よりその少しく下の所まで、に及ぼすべし、腹の周圍の輕擦法には二通りあり、その一は右の掌を盲腸の所へあて、左の掌は左方の肋骨部の下に置き、左右同時に動かして、右は上外方に、左は下内方に擦り、他の一は右の手の拇指以外の四指の腹を同じく盲腸部におき、左の手の指の正面を其の上に加へ、以て右の指を屈らざらしめよ、こゝに於て力を用ゐて大腸に向ひ次第に強く摩擦すべし、左の腸骨の内側にて指を深く、骨盤内に向ひて押し之れより力をゆるめて、最初のところへ歸るなり。

(二) 揉捏法、胃、小腸、大腸等の部分に由りて同じからず、先づ胃より初めに、胃及び小腸の部分は両手を用ふ、拇指と人示指との間を開き、その拇指を腹

心臓の鼓動を減ずる法

全身マッサージ

の右に他の四指を左に加へ、胃腸を揉み、右の手を腹の右側に置き、左の手を腹の左側におき、腹の大部分を一時に揉捏すべし、大腸の部分は、左右の手を腹の兩側におき、拇指と人示指とを開きて、拇指を前方に、他の四指を後方に當て、以て腹の兩側をその間に挟み、左右等しく指を動かして、腹の筋と腸との間とをその指の間に於て揉捏すべきなり。

(三) 叩打法、短時間の叩打を貴ぶ、長きに過ぐれば、反射的に心臓の鼓動を減ぜしむる事あり、生理學上動物試験によりて直ちに證明せらるゝ現象なればなり。

(四) 振顫法、手を平に腹に置き、或は片手又は兩手を用ゐて、腹の一部を握り、振顫運動を與ふるなり、而して後に指端を斜に臍と水落ちとの中間に加へ、強く振顫を與ふべし。

次に全身マッサージを行ふ順序は一定せずと雖も、左の順序によるべし、即ち下肢、上肢、背部、胸部、腹部、頸部及び頭部これなり。

(イ) 下肢のマッサージは第一節にてほゞ説きしが、更に主なる方法を擧ぐ

全身各部の  
マッサージ法

れば左の如し。

(甲) 輕擦法を用ふべき所は(一)足背及び足趾(後者は持髀) (二)下腿の前後、大

腿の前後等なり、兩手を使ふべし。 (乙) 揉捏法を用ふべき所は、(一)兩手にて足をと

とを共に揉捏すべし、(二)足關節の周圍の骨の間に指端にて揉捏を加ふべし、

(三)下腿の皮膚に皮膚揉捏をなすべし、(四)大腿の皮膚にも亦然り。

(丙) 輕擦法と揉捏法とを混用すべきところは、(一)趾の端より根元まで、(二)趾

骨の間、(三)臀部、但し女子にては外側の方に留むべし。

(丁) 叩打法を用ふべきは、臀、大腿及び下腿とす。

(ロ) 上肢のマッサージは、下肢に似るを以て之を略す。

(ハ) 背部マッサージは、脊柱(俗にセボネ)の兩側を上より下方に、又下方より

上方に往來する輕擦法を行ふ、且つ同時に叩打法をも併用すべし、然る後に

全體の輕擦法を行へば、大に可なり(但しこれは一般の事なり)。

(ニ) 胸部のマッサージ、胸の正中より腋の下及び肋骨の部分へ輕擦法を行

ふべし、而して腋の下前方にある太き筋肉は揉捏法を行ひ、後に胸部全體

の輕擦法を行ひて、全くこの部分の手術を終る事になるなり。

(ホ) 腹部のマッサージは前に述べしが如く、主として輕擦と揉捏とを兼用

するなり。

(ヘ) 頸部のマッサージ、これも上述の如く輕擦と揉捏の二法を行ひて可

り、重複する故に茲には略しぬ。

頭部の  
マッサージ法

(ト) 頭部のマッサージ、この方法は兩手を用ひ、側頭の部分より後方に強

輕擦をしながら、進み行き、次で側部、前頭後頭及びこめかみの部分を、拇

及び他の四指とを用ひて揉捏法をなし、その終りに指端又は小指側にて輕

く、且つ速なる弾力性の叩打法を行ひ、且つその叩打する所はなるべく廣

き部分に互らざるべからず。

以上記する所にて、マッサージとは如何なるものなるや、且つ如何にして行

### 第四章 結論

以上にてマツサーシとは如何なるものなるか、マツサーシを行ふ方法、作用、治療法を述べたるを以て本章にはマツサーシを行ふべき人々の注意を要する事項を述べんとす、此注意は、苟もマツサーシを行はんと欲する者は一々服膺するの義務あるものなり。

マツサーシ術者の注意

(イ) マツサーシを行ふには、患者に帶又は紐の類を禁ぜざるべからず、これ血行を妨ぐるを以てなり。

(ロ) マツサーシを行ふ時間は、一部分の時には五分以上三十分を限りとし、全身の時は一時間位に限るべし、病氣治療の目的ならば、一日一回又は二回行ふべし、疲勞を醫するためならば、數日に一回にて可なり。

(ハ) マツサーシに要する力は強きを望まず。

(ニ) マツサーシと電気療法、水治療法、温泉療法、催眠術療法、殊に精神療法に兼用する時はその効は更に大となるものなり。

精神療法とマツサーシとの關係

消毒と診断

(ホ) 術者は手術の前後に、必ず手の消毒を忘るべからず、千倍の昇汞水は最も可なり、最後に留意すべきは、診断法を辨へて適應症なるや否やを明かにし、而して後に着手するを要す、故に多少醫學上の素養なくして本術を行ふは實に危険なりと云はざるべからず。

(ヘ) マツサーシを行ふには、丁寧なるべし、不親切の行爲あるべからず、殊に品性を高潔に保つべきなり。

(ト) 精神療法を行ふ人にしてマツサーシの一斑に通ぜざれば、療法を完全に行ふ能はず、従つてマツサーシを少しも知らざれば、精神療法家としての實力なき人であることを、力説して本書を結びます。

### 西洋按摩術終

光格天皇御製

くしの道釋迦の教へもすてずして

つくゑの島のかたはしにをけ

神様の國に生れて神さまの

道がいやならとつ國にゆけ

大正九年十月廿二日印刷  
大正九年十月廿五日發行



著作兼發行者  
東京市芝區琴平町三番地  
古屋景晴

印刷者  
東京市麻布區本村町十八番地  
中野鏝太郎

印刷所  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
東洋印刷株式會社

發行所

東京市芝區琴平町三番地  
精神研究會

電話新橋一八七五番  
振替口座東京二三五一番

# 初學者に最適の大珍書

古屋鐵石先生著

四六大判壹百八十五頁 男も女も讀め  
定價送料共金壹圓六錢

# 秘密獨習 成功確實 女催眠術 色魔 禁讀

此催眠法は被術者を神道に云ふ神人合一、佛教に云ふ眞如法性、基督教に云ふ見神の状態となすにあり

●口繪 女催眠術家が不思議の實驗をなしたる處の寫眞版數個挿入  
著者多年研究の結果最近の發見になれる進歩せる催眠術を婦女子と雖も秘密に自宅にて獨習し、精神療法を行ひ得る様容易に秘訣を講述せり、自身又は家族の中に人に話せぬ煩悶に惱める者、藥物無効の病癢に苦める者あらば試みよ、殊に精神の慰藉と人格の修養とに力を賤ぎ婦女子に關する面白き問題を解説しあり、讀んで面白き事不思議なる事小説以上なりふり假名附故小學卒業の學力にて讀め實行し得る

## 精神療法講義錄 第一輯 目次

<b>催眠術療法</b> (一)精神療法とは何ぞや (二)催眠術療法とは何ぞや (三)催眠術療法に必要の無我修養法 (四)催眠術療法で癒る病氣 (五)催眠術療法診察法 (六)催眠術療法を行ふ法 (七)催眠術療法受術者修養法	<b>靜坐呼吸療法</b> (一)靜坐呼吸療法とは何ぞや (二)藤田式靜坐呼吸療法 (三)岡田式靜坐呼吸療法 (四)古屋式靜坐呼吸療法	<b>自己催眠療法</b> (一)自己催眠療法とは何ぞや (二)自己催眠療法豫備修養法 (三)自己催眠療法を行ふ法	<b>催眠遠隔療法</b> (一)催眠遠隔療法とは何ぞや (二)催眠遠隔療法の原理 (三)催眠遠隔療法を行ふ法 (四)催眠遠隔療法受術者修養法	<b>暗示術療法</b> (一)暗示術療法とは何ぞや (二)暗示術療法を行ふ法 (三)暗示術療法練習法	<b>プラナ療法</b> (一)プラナ療法とは何ぞや (二)プラナ療法を行ふ法 (三)プラナ療法を行ふ法	<b>精神分析合成療法</b> (一)精神分析合成療法とは何ぞや (二)精神分析合成療法法の原理 (三)精神分析合成療法を行ふ法 (四)精神分析合成療法法の實例	<b>學說得療法</b> (一)學說得療法とは何ぞや (二)學說得療法を行ふ法 (三)學說得療法の模範例	<b>心靈術療法</b> (一)心靈術療法とは何ぞや (二)心靈術療法 (三)心靈術療法 (三)古屋鐵石式心靈術療法
---	---	---	---	---	--	--	--	--

(精神療法講義錄目次)

## 精神療法講義錄 第三輯 目次

<b>人身マゴ療法</b> (一)人身マゴ療法とは何ぞや (二)人身マゴ療法法の原理 (三)人身マゴ療法法を行ふ法	<b>信仰療法</b> (一)信仰療法とは何ぞや (二)自力信仰療法の原理現象 (三)他方信仰療法の原理現象 (四)信仰療法を行ふ法	<b>クリスチヤン療法</b> (一)クリスチヤン療法とは何ぞや (二)クリスチヤン療法法の原理 (三)クリスチヤン療法の奇蹟 (四)クリスチヤン療法を行ふ法	<b>大靈道靈子術療法</b> (一)大靈道靈子術療法とは何ぞや (二)顯動作用を起さす法 (三)潛動作用を起さす法 (四)田中守平式靈子術療法 (五)古屋鐵石式靈子術療法 (六)新聞記者の實驗せる靈子術療法	<b>哲理療法</b> (一)哲理療法とは何ぞや (二)哲理療法 (三)哲理療法 (三)古屋鐵石式哲理療法 (四)雜誌記者の批判せる哲理療法	<b>靈智學隱秘療法</b> (一)靈智學隱秘療法とは何ぞや (二)靈智學隱秘療法法を行ふ法	<b>稼働無想療法</b> (一)稼働無想療法とは何ぞや (二)稼働無想療法法を行ふ法	<b>環境轉換療法</b> (一)環境轉換療法とは何ぞや (二)環境轉換療法法を行ふ法	<b>慰藉歡樂療法</b> (一)慰藉歡樂療法とは何ぞや (二)慰藉歡樂療法法を行ふ法 (三)精神療法成功の秘訣	<b>人身自由術療法</b> (一)人身自由術療法とは何ぞや (二)人身自由術療法法を行ふ法
---	--	---	--	--	--	---	---	--	--

三

精神療法講義錄第五輯 古屋鐵石講述 (菊大判總頁數壹百有餘頁 五號活字總振假名附珍本)

通信教授 靈力發顯術

價郵共金壹圓、送料不要 但新領土貳割増、外國倍増、

本書講述科目の諸術に就き、簡易に何人にて一讀直に實行し得る様に講述せり、本書講述の諸術は坊間に散在せる書籍の説明と全然趣を異にし、悉く靈力の發顯である、若し本書講述の諸術が物理現象と思ふ人、本書を讀み之を實現すると靈力發顯の不可思議なるに驚愕せらるゝなるべし (無料で施術を受け又は無料で諸術を見て大金を費されば覺えられぬ) (諸術を口へて覺えんとする下心ある人は是非細讀すべき文字あり。)

講述科目

- 獨習 棒寄棒開術
- 成功 紙刀棒切術
- 保證 火吞火食術
- 人體輕飛術
- 麻繩手斷術
- 鳥蟲止動術
- 輕重轉換術
- 鐵棒屈曲術
- 人體架橋術
- 讀筋讀心術
- 靈力消燈術
- 金剛不壞身術
- 剛膽不死身術
- 熱湯入手術
- 熱鐵拔術
- 掌上火焰術
- 棒天狗術
- 圓机靈轉術
- 靈智靈覺術
- 靈動寫眞術
- 萬里眼透見術
- 現神現佛術
- 覺醒時錯覺術
- 刀劍刃止術
- 靈媒普蘭術
- 即感人體自由術
- 熱鐵入術
- 魔法振子術
- 物體靈動術
- 圓机靈轉術
- 靈智靈覺術
- 靈動寫眞術
- 萬里眼透見術

精神療法講義錄第六輯 古屋鐵石講述

通信教授 生靈死靈術

價郵共金壹圓、送料不要、但新領土貳割増、外國倍増、  
大學校教授、博士、男爵、檢事、其他多くの心象學者、實驗に立會ひ、一點も疑ふの餘地なしとして承認したる、奇絶、怪絶、珍絶、妙絶なる生靈死靈の大珍現象を紹介したるもので、全世界に亘りて、之れ以上不可思議の事實なしと斷言す。

講述目次

(巾五寸縦七寸の菊判總頁數壹百有餘頁五號活字總振假名附珍本)

- 世界無比 生靈死靈術研究の沿革
- 無象 死後靈魂存續の證明
- 珍象 人體死靈交換術
- 幽靈飛動現出術
- 交靈遠視遠聽術
- 玄妙不可思議靈體術
- 靈力寢臺飛上術
- 肉死靈生阿修羅術
- 幽靈寫眞撮影術
- 男女精神交接術
- 遠隔者即感術
- 男女思想傳達術
- 人體磁力術
- 摩訶靈怪鬼神術
- 悉怪絶

附錄 西洋按摩術 醫學士 志賀光明講述





古屋鐵石先生述

上下貳卷完結

(菊判總頁數貳百拾頁五)

集募大員會

# 運命豫言流講義錄

●通信教授 ●全貳卷金貳圓

●貳圓分納金壹圓二拾錢宛

●新領土二割増 ●外國倍増

是非讀め!

高尚な職業を求むる人  
金満家と成らんとする人  
理想の配偶者を得んとする人  
終生幸福とする人  
是非讀め!

運命豫言を行ふに法のみならずよりて決する間違ひ多し各術を網合して判断すれば百發百中疑ひなし。

## 講述科目

人相判断術	九星術
顔筋吉凶術	淘宮術
黒子吉凶術	指紋術
手相判断術	家相術
人心看破術	方位崇除術
姓名判断術	相場豫知術
天源術	墨色判断術

以上の諸術に付奥義を公開せり、素人にも容易に獨習にて開業し得る實力を得せしむ、運命豫言術の開業は時世に適應し高尚にして收益多し、救世的に副業とするは最も妙也、志望者は貴切ぬ中に速に入會せられたし。

世界第一  
最良珍書

# 高等催眠學

掲載  
目次

●業判總頁 壹千有餘頁 ●自第壹卷至第拾卷 ●分卷壹册金六拾錢 ●自第壹卷至第五卷 ●合級上等製價金四圓 ●自第六卷至第拾卷 ●合級上等製價金四圓 ●新領土二割増 ●諸外國五割増

## 第壹卷 歴史篇

- 口書寫眞版七個挿入
- 一 緒言
- 二 催眠術の定義
- 三 催眠術の歴史
- 四 催眠術の起原
- 五 催眠術の特色
- 六 催眠術の應用
- 七 催眠術の歴史
- 八 催眠術の起原
- 九 催眠術の特色
- 十 催眠術の應用
- 十一 催眠術の歴史
- 十二 催眠術の起原
- 十三 催眠術の特色
- 十四 催眠術の應用
- 十五 催眠術の歴史
- 十六 催眠術の起原
- 十七 催眠術の特色
- 十八 催眠術の應用
- 十九 催眠術の歴史
- 二十 催眠術の起原
- 二十一 催眠術の特色
- 二十二 催眠術の應用
- 二十三 催眠術の歴史
- 二十四 催眠術の起原
- 二十五 催眠術の特色
- 二十六 催眠術の應用
- 二十七 催眠術の歴史
- 二十八 催眠術の起原
- 二十九 催眠術の特色
- 三十 催眠術の應用

- 五 無痛拔牙の發見
- 六 催眠術の歴史
- 七 催眠術の起原
- 八 催眠術の特色
- 九 催眠術の應用
- 十 催眠術の歴史
- 十一 催眠術の起原
- 十二 催眠術の特色
- 十三 催眠術の應用
- 十四 催眠術の歴史
- 十五 催眠術の起原
- 十六 催眠術の特色
- 十七 催眠術の應用
- 十八 催眠術の歴史
- 十九 催眠術の起原
- 二十 催眠術の特色
- 二十一 催眠術の應用
- 二十二 催眠術の歴史
- 二十三 催眠術の起原
- 二十四 催眠術の特色
- 二十五 催眠術の應用
- 二十六 催眠術の歴史
- 二十七 催眠術の起原
- 二十八 催眠術の特色
- 二十九 催眠術の應用
- 三十 催眠術の歴史
- 三十一 催眠術の起原
- 三十二 催眠術の特色
- 三十三 催眠術の應用
- 三十四 催眠術の歴史
- 三十五 催眠術の起原
- 三十六 催眠術の特色
- 三十七 催眠術の應用
- 三十八 催眠術の歴史
- 三十九 催眠術の起原
- 四十 催眠術の特色
- 四十一 催眠術の應用
- 四十二 催眠術の歴史
- 四十三 催眠術の起原
- 四十四 催眠術の特色
- 四十五 催眠術の應用

## 第貳卷 原理篇

- 口書寫眞版三個と木版圖五個挿入
- 一 催眠術の原理
- 二 催眠術の分類
- 三 催眠術の起原
- 四 催眠術の特色
- 五 催眠術の應用
- 六 催眠術の歴史
- 七 催眠術の起原
- 八 催眠術の特色
- 九 催眠術の應用
- 十 催眠術の歴史
- 十一 催眠術の起原
- 十二 催眠術の特色
- 十三 催眠術の應用
- 十四 催眠術の歴史
- 十五 催眠術の起原
- 十六 催眠術の特色
- 十七 催眠術の應用
- 十八 催眠術の歴史
- 十九 催眠術の起原
- 二十 催眠術の特色
- 二十一 催眠術の應用
- 二十二 催眠術の歴史
- 二十三 催眠術の起原
- 二十四 催眠術の特色
- 二十五 催眠術の應用
- 二十六 催眠術の歴史
- 二十七 催眠術の起原
- 二十八 催眠術の特色
- 二十九 催眠術の應用
- 三十 催眠術の歴史
- 三十一 催眠術の起原
- 三十二 催眠術の特色
- 三十三 催眠術の應用
- 三十四 催眠術の歴史
- 三十五 催眠術の起原
- 三十六 催眠術の特色
- 三十七 催眠術の應用
- 三十八 催眠術の歴史
- 三十九 催眠術の起原
- 四十 催眠術の特色
- 四十一 催眠術の應用
- 四十二 催眠術の歴史
- 四十三 催眠術の起原
- 四十四 催眠術の特色
- 四十五 催眠術の應用

- 一 哲學的の二元論
- 二 二元論の哲學
- 三 二元論の哲學
- 四 二元論の哲學
- 五 二元論の哲學
- 六 二元論の哲學
- 七 二元論の哲學
- 八 二元論の哲學
- 九 二元論の哲學
- 十 二元論の哲學
- 十一 二元論の哲學
- 十二 二元論の哲學
- 十三 二元論の哲學
- 十四 二元論の哲學
- 十五 二元論の哲學
- 十六 二元論の哲學
- 十七 二元論の哲學
- 十八 二元論の哲學
- 十九 二元論の哲學
- 二十 二元論の哲學
- 二十一 二元論の哲學
- 二十二 二元論の哲學
- 二十三 二元論の哲學
- 二十四 二元論の哲學
- 二十五 二元論の哲學
- 二十六 二元論の哲學
- 二十七 二元論の哲學
- 二十八 二元論の哲學
- 二十九 二元論の哲學
- 三十 二元論の哲學
- 三十一 二元論の哲學
- 三十二 二元論の哲學
- 三十三 二元論の哲學
- 三十四 二元論の哲學
- 三十五 二元論の哲學
- 三十六 二元論の哲學
- 三十七 二元論の哲學
- 三十八 二元論の哲學
- 三十九 二元論の哲學
- 四十 二元論の哲學
- 四十一 二元論の哲學
- 四十二 二元論の哲學
- 四十三 二元論の哲學
- 四十四 二元論の哲學
- 四十五 二元論の哲學







- (一) 催眠術の原理
- (二) 千里眼の原理
- (三) 催眠術と治療との關係
- (四) 催眠術の効用
- (五) 催眠術の修業
- (六) 催眠術の修業
- (七) 催眠術の修業
- (八) 催眠術の修業
- (九) 催眠術の修業
- (十) 催眠術の修業
- (十一) 催眠術の修業
- (十二) 催眠術の修業
- (十三) 催眠術の修業
- (十四) 催眠術の修業
- (十五) 催眠術の修業
- (十六) 催眠術の修業
- (十七) 催眠術の修業
- (十八) 催眠術の修業
- (十九) 催眠術の修業
- (二十) 催眠術の修業

第八卷治療編上

- (一) 催眠術にて治し得る疾患
- (二) 催眠術にて治し得る疾患
- (三) 催眠術にて治し得る疾患
- (四) 催眠術にて治し得る疾患
- (五) 催眠術にて治し得る疾患
- (六) 催眠術にて治し得る疾患
- (七) 催眠術にて治し得る疾患
- (八) 催眠術にて治し得る疾患
- (九) 催眠術にて治し得る疾患
- (十) 催眠術にて治し得る疾患
- (十一) 催眠術にて治し得る疾患
- (十二) 催眠術にて治し得る疾患
- (十三) 催眠術にて治し得る疾患
- (十四) 催眠術にて治し得る疾患
- (十五) 催眠術にて治し得る疾患
- (十六) 催眠術にて治し得る疾患
- (十七) 催眠術にて治し得る疾患
- (十八) 催眠術にて治し得る疾患
- (十九) 催眠術にて治し得る疾患
- (二十) 催眠術にて治し得る疾患

- (一) 催眠術の原理
- (二) 催眠術の原理
- (三) 催眠術の原理
- (四) 催眠術の原理
- (五) 催眠術の原理
- (六) 催眠術の原理
- (七) 催眠術の原理
- (八) 催眠術の原理
- (九) 催眠術の原理
- (十) 催眠術の原理
- (十一) 催眠術の原理
- (十二) 催眠術の原理
- (十三) 催眠術の原理
- (十四) 催眠術の原理
- (十五) 催眠術の原理
- (十六) 催眠術の原理
- (十七) 催眠術の原理
- (十八) 催眠術の原理
- (十九) 催眠術の原理
- (二十) 催眠術の原理

第九卷治療篇下

- (一) 模範的催眠術治療の實例
- (二) 模範的催眠術治療の實例
- (三) 模範的催眠術治療の實例
- (四) 模範的催眠術治療の實例
- (五) 模範的催眠術治療の實例
- (六) 模範的催眠術治療の實例
- (七) 模範的催眠術治療の實例
- (八) 模範的催眠術治療の實例
- (九) 模範的催眠術治療の實例
- (十) 模範的催眠術治療の實例
- (十一) 模範的催眠術治療の實例
- (十二) 模範的催眠術治療の實例
- (十三) 模範的催眠術治療の實例
- (十四) 模範的催眠術治療の實例
- (十五) 模範的催眠術治療の實例
- (十六) 模範的催眠術治療の實例
- (十七) 模範的催眠術治療の實例
- (十八) 模範的催眠術治療の實例
- (十九) 模範的催眠術治療の實例
- (二十) 模範的催眠術治療の實例

治療暗示に就き注意すべき點

- (一) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (二) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (三) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (四) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (五) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (六) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (七) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (八) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (九) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十一) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十二) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十三) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十四) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十五) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十六) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十七) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十八) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (十九) 治療の暗示は實驗の暗示より
- (二十) 治療の暗示は實驗の暗示より

催眠術治療法と精神療法との關係

- (一) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (二) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (三) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (四) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (五) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (六) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (七) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (八) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (九) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十一) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十二) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十三) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十四) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十五) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十六) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十七) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十八) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (十九) 催眠術治療法と精神療法との關係
- (二十) 催眠術治療法と精神療法との關係

- (一) 呼吸器の實例
- (二) 呼吸器の實例
- (三) 呼吸器の實例
- (四) 呼吸器の實例
- (五) 呼吸器の實例
- (六) 呼吸器の實例
- (七) 呼吸器の實例
- (八) 呼吸器の實例
- (九) 呼吸器の實例
- (十) 呼吸器の實例
- (十一) 呼吸器の實例
- (十二) 呼吸器の實例
- (十三) 呼吸器の實例
- (十四) 呼吸器の實例
- (十五) 呼吸器の實例
- (十六) 呼吸器の實例
- (十七) 呼吸器の實例
- (十八) 呼吸器の實例
- (十九) 呼吸器の實例
- (二十) 呼吸器の實例

- (一) 呼吸器の實例
- (二) 呼吸器の實例
- (三) 呼吸器の實例
- (四) 呼吸器の實例
- (五) 呼吸器の實例
- (六) 呼吸器の實例
- (七) 呼吸器の實例
- (八) 呼吸器の實例
- (九) 呼吸器の實例
- (十) 呼吸器の實例
- (十一) 呼吸器の實例
- (十二) 呼吸器の實例
- (十三) 呼吸器の實例
- (十四) 呼吸器の實例
- (十五) 呼吸器の實例
- (十六) 呼吸器の實例
- (十七) 呼吸器の實例
- (十八) 呼吸器の實例
- (十九) 呼吸器の實例
- (二十) 呼吸器の實例

- (四) 十九ヶ年間の遺尿一回の施術にて治せし真例
- (一七) 神經衰弱治療の真例
- (一六) 一回の施術に要する時間
- (一五) 數名一度に施術したる真例
- (一四) 神經衰弱者の症候
- (一三) 赤面癖の症候
- (一二) 赤面癖の検査
- (一一) 赤面癖の検査
- (一〇) 赤面癖の検査
- (九) 赤面癖の検査
- (八) 赤面癖の検査
- (七) 赤面癖の検査
- (六) 赤面癖の検査
- (五) 赤面癖の検査
- (四) 赤面癖の検査
- (三) 赤面癖の検査
- (二) 赤面癖の検査
- (一) 赤面癖の検査

第十卷 動物催眠

- (一) 動物催眠の沿革
- (二) 動物催眠と人間催眠との差
- (三) 動物を催眠せしむる法
- (四) 動物催眠の原理
- (五) 動物催眠の法
- (六) 動物催眠の法
- (七) 動物催眠の法
- (八) 動物催眠の法
- (九) 動物催眠の法
- (一〇) 動物催眠の法
- (一一) 動物催眠の法
- (一二) 動物催眠の法
- (一三) 動物催眠の法
- (一四) 動物催眠の法
- (一五) 動物催眠の法
- (一六) 動物催眠の法
- (一七) 動物催眠の法
- (一八) 動物催眠の法
- (一九) 動物催眠の法
- (二〇) 動物催眠の法

此目次を精讀して内容を充實を知られよ

- (一) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (二) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (三) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (四) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (五) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (六) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (七) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (八) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (九) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一〇) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一一) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一二) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一三) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一四) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一五) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一六) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一七) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一八) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (一九) 動物は如何の理によりて催眠せるや
- (二〇) 動物は如何の理によりて催眠せるや

金壹圓以下の注文は迷惑につき絶対に謝絶す

古屋鐵石著 自第一卷至第十卷十冊完結

●高等催眠學講義錄 壹冊定價郵共金六十錢

古屋鐵石著 (初學者に適する書)

●催眠術獨習自在 定價郵共四拾貳錢

一公爵二伯爵題五博士序 古屋鐵石著

●催眠術寶典 定價拾圓送料內地卅六錢郵費六拾五錢

古屋鐵石著 上製一圓五十錢 並製壹圓六錢

●成功確實 女催眠術

古屋鐵石著 送料內地十八錢 朝鮮四拾五錢

●神靈治療法 定價壹圓五十錢

古屋鐵石著

●女生殖器病獨療法 參拾貳錢

農商務省實用新案登錄簿

●複式催眠眼 價郵稅共三圓五拾錢

博士學士五十有餘名論集 第大版一頁

●不思議の研究 價郵稅共六拾四錢

パキン博士發明品模造 (金屬製品)

●催眠治療具 價郵稅共四圓五拾貳錢

古屋鐵石著

●神經衰弱獨療法 參拾貳錢

明法學士 兩宮良作先生著

●取締法規詳解 價郵稅共五拾貳錢

論說 寫真版三枚 一組

●催眠術繪葉書 參拾貳錢

(精神研究會發賣書目)

---

年或回春秋(發行(精神研究會機關雜誌))

●國民道徳 共一冊定價郵稅共五拾錢

八冊合本金文字入

●國民道徳合冊 定價郵稅共壹圓八拾錢

國民道徳前編合冊上等製本

●精神治療新報合冊 價郵稅共壹圓八拾錢

古屋鐵石著(上中下三冊)

●運命豫言術講義錄 參與金壹圓

古屋鐵石著(金屬製品)

●催眠術視球 價郵稅共壹圓五拾錢

井上博士序 大野美惠丸著

●催眠術習講話 價郵稅共九拾貳錢

術新論著

●フランセツト 定價壹圓五拾錢送料內地八錢

米國製模造品(臺灣支那は送料四十五錢)

●東京で自活する法 價郵稅共參拾貳錢

獨立亭成功著(附田舎生活副業法)

●催眠精神治療券綴 價郵稅共八拾四錢

內務大臣御届済(精神治療家必携)

●靈魂不滅論 價郵稅共貳拾貳錢

松木天籟著

●催眠術獨習古 價郵稅共六拾四錢

東久世伯爵題 高波博士序 古屋鐵石著

---

八冊合卷總クロース金文字入(國民道徳前編)

●精神新報合綴 定價小包料共壹圓八拾錢

●用適催眠術實驗寫真版 價郵稅共貳拾貳錢

古屋鐵石著

●催眠法律論 價郵稅共貳拾五錢

古屋鐵石著

●催眠宗教論 價郵稅共六拾四錢

古屋鐵石著

●坐禪獨習法 價郵稅共六拾五錢

古屋鐵石著

●自在自己催眠 價郵稅共壹圓四錢

古屋鐵石著

●宗教奇蹟研究 價郵稅共六拾四錢

古屋鐵石著

●男女運命豫知術 價郵稅共壹圓四錢

伊藤公爾題 井上博士序 古屋鐵石著

●驚神的大魔術 價郵稅共壹圓四錢

嘉納講道館長題 松木博士序 古屋鐵石著

●氣合術獨習法 價郵稅共壹圓四錢

古屋鐵石著

●應用家庭禁厭術 價郵稅共壹圓四錢

東久世伯爵題 古屋鐵石著

# 讀者への御注意(山師と詐欺師)

本會主張の學說と實驗とに反する廣告をする者は、多くは山師又は詐欺師と思ひ、引き掛からぬ様御注意なさいまし。

**面會**、何人にてても、突然本會を御訪問に  
なりますと、會長は面會致しません、  
豫め御手数數乍ら往復葉書を以て用件  
を記し、面會日の都合御問合せの上に  
御訪問下さい、然れば必ず御訪問の御  
意思御貫徹になる様に盡力致します、  
突然の御訪問では先約ある爲め遺憾  
乍ら面會を謝絶します、又面會しても  
僅か二三分時の外面會することは出  
來ません。(本會機關雜誌は春  
秋二回の發行です)

**郵書**、質問書、受験答案其他郵書を本會  
へ御提出に就ては、其都度雜誌「國民  
道徳」に其方式を掲げます、其注意に  
反するときは總て無効とします。

**定價**、本會發行の書籍は内務省に届出  
の定價より一錢でも割引して賣買す

る事を禁ぜられてあります之を犯す  
と罰金を取らるゝ規定(東京市日本橋  
區材木町東京書籍商組合事務所)に規  
定書具へあり)がありますから、必ず  
値上げの新定價で御求め下さい。

**治療**、單に本會の講義録を讀みしに止  
まり、會費を納めず、本會に何等交渉  
なく治療を行ひ、警察より取調べられ  
初めて本會を引き合ひに出し、爲に本  
會は警察の照會に接し、非常に迷惑を  
蒙ること往々あり、今後斯る場合に斯  
る人に關しての警察署の照會に對し  
ては斷じて治療を禁止せらるゝ様回  
答します、故に斯る人は決して本會を  
引き合ひに出してはなりません。

**葉書の注文と問合**は返答せま

280  
241



終

